白鳥のみずうみへ、いざ

舞夜じょんぬ

ー

ー

　どうしても、青潟大学附属中学に行きたかったわけじゃなかった。
　たまたま合格発表の日、「羽飛貴史」と合格者の欄に俺の名前が書き出されていたもんだからラッキーってことで入学手続きを親にやらせてしまった。美里の名前も俺の隣に並んでいたけど、そんなのただの腐れ縁だって。気にしちゃいなかった。
　ということで、とうとう来ました、今日は晴れの入学式だ。
　「青潟大学附属中学校・祝・入学」を果たした感想を、俺はは表向きこんな風にまとめておいた。

「入学式くらい、きちっとして行きなさいよ。ほら、貴史。なにやってるのあんた。ネクタイを蝶結びにするんじゃないって。最初の印象があとあとまで響くんだからね。ああいうエリートのお坊ちゃんお嬢ちゃんがいく学校なんだから。っと、待ちなさい！」
　公立の入学式だったら、うちの母ちゃん、決して着ねえだろうな。
黒羽織に紋付の着物を母ちゃんはたんすから引っ張り出し、姉ちゃんに帯持たせてめかし込んでやがる。そんなの俺には関係ないね。無視した。さっさと玄関で靴履いた。父ちゃんが会社にはいていくみたいな黒い靴がたたきにならんでいた。やたら足が痛いんだよなあ。スニーカーでいい。俺はさっさといつものスニーカーで足元を決め、外へ飛び出した。
「なんで自転車なんて引っ張り出すの貴史！　最初くらい母さんと一緒に行くんでしょ！　車で行くんだからね。服が汚れるでしょ、ああ、あんた今度はなにやってるの、ほっぺたになんではみがきの白い泡つけてるの！　顔、洗ってきなさいよ！」
　ペダルを踏む前に、一声かけた。
「かあちゃん、あまりけばい顔してくるなよ」
　母ちゃんのしたくが完璧に整うまでお行儀よく待っていたら、入学式・初遅刻しちまうのは明らかだ。うちの母ちゃん、どう見てもおかめ顔なのに、なんでほっぺたに白いおしろいをたっぷりはたくんだ？　大福餅そのものでぷっくりふくれて見えるのになあ。男の視線は厳しいんだぞ。目鼻の感覚があいまいになっちまって、まず、見られたもんじゃない。正直なところ、俺だって男、美人と歩きたい。母ちゃんはパス。

　俺はひとり、風を切り、漕ぎ進んだ。
　「青潟大学附属中学校」略して「青大附属」これから俺が三年以上、うまくいけば十年くらいはお世話になるであろう学校のことを、ちょこっと考えた。
　青潟市に唯一存在する共学私立中学校で、「附属」とあるように三・三・四年間の一貫教育をモットーとしている、いわゆる「エリート中学」だ。よっぽどのことがない限り、ストレートで高校、大学に進学することができると俺は親たちから聞かされた。どうだっていいんで今年の

入試競争倍率なんて見ちゃいなかったけど、母ちゃんたちが騒いでたので耳には入っている。五倍だったんだそうだ。五人いたら四人は落っこちてるって寸法だな。
　青潟の小学六年で、少しばかり頭の回転がよさそうだとか、「優等生」だとか、そういう奴なら必ず一度は考える「青大附中」の入試。なんで俺は受けちまったのか、よくわからねえ。いやいや、受かったこと自体、どう考えたって、奇跡だよな。世の中には家庭教師、通信教育、塾もろもろの「受験産業」が存在するそうだが、俺はぜんぜんそんなものに近寄りゃしなかった。父ちゃん母ちゃん、なんで俺を受験させることにＯＫ出したんだ？　実は一番の謎ってそれじゃあねえか？
　まあ、あえて言えばだ。美里が入試前日、俺のうちに遊びに来て、
「あんた、本当に間に合うと思ってるの！　一応、試験の問題集、使わないのあるから、あげるよ」
　ほざいて薄っぺらい国語の問題集置いてった。
「いまさらあせってどうするってんだよ、ばーか。美里の方こそ、しゃきっとしろっての、ほーら、深呼吸してさっさと帰れって」
　要するに美里が落ち着きたかっただけだろ。そんなのお見通しだってな。

　青大附属って、金持ちのエリート、天狗ばかりだって噂、聞いたけどな。
　それとも性格のまがったガリ勉かよ？
　最低でも美里程度に冗談通じる奴がいねかったら、俺、干からびちまうぞ。

　独りでぶつぶつつぶやいてる俺って怪しすぎる。
　真っ赤な三角屋根のうちが見えた。美里んちの前まで来た。一声掛けてやるか。ちょいと玄関に自転車を置いて覗いてみた。
「みさとー！　行くかー！」
　毎朝美里を迎えにいく時と同じく、玄関の前で叫んでみた。
　美里の部屋は二階だから、玄関に入らなくても、窓から聞こえるはずだ。
　けど、誰も入ってこなかった。よく見ると、家うしろの車庫もシャッターが開けっ放しだった。たぶん美里の父さん、車でそのまんまあいつを学校に連れてったみたいだ。
　美里の父さん母さん、相当舞い上がってると見える。
　今日は泥棒入っても文句言えねえよな。しゃあないんで、俺は自転車から降りて、シャッターを下ろしておいた。鍵はかかってないが、まあいっかってとこだ。

　美里が青大附中を受験することに決めたのは、六年の最初だって聞いている。うちの母ちゃんが言うには、それでも遅すぎるんだという。俺もあいつから聞いたのは夏休みが終わってからだった。
　言っちゃなんだが、美里も俺とつるんでる奴だ。どう考えたって「優等生」面なんてしちゃあいない。小学校だから、学年順位なんて見たこともねえ。ただ俺んとこと美里の親とが二組で相談

しあって、「ふたりともこれだと行けそうよ」とか言ってたのはちらと聞いていた。

　合格発表の日、たまたま俺と美里の名前が張り出されているのを見つけた。
　同じ小学校から受験した奴は結構いた。確か五人くらいだった。同じクラスの女子も一緒に受けていた。
　俺が八十一番。美里が八十二番。
　次の番号は一気に九つ飛んで、九十一番だった。
「受かってる！貴史、あたしと一緒に受かってるよ！」
　さっきまでずっと「中学は義務教育だから、落ちたっていいよね！」なんてつらっとした顔してたくせにだ。美里の奴、俺の肩をすごい勢いで揺さぶりやがった。まだ三月半ばったら雪も膝くらいまで積もってるのにだ。思いっきり青大附中の校門とこでこけるとこだった。
「おい、落ち着けよ。俺が落ちるわけないだろ、ばーか」
「私は受かってるの！　とにかく嬉しいの！」
　肩にかじりついてきた。しゃあないから俺も美里が落ち着くまで足を踏ん張っていた。周りの小学六年連中はみな、父ちゃん母ちゃんと一緒に笑ったり泣いたりしてうるさいのにだ。同級生同士できたのはどうやら俺たちだけみたいだった。
　俺は美里の頭を軽く小突いた。
「おまえ、死ぬ気になって、冬休みから勉強してたろ。塾なんか行ってな」
「だって、行けって言われたんだもん、しょうがないじゃない」
　美里の声が少しくぐもってきた。別に責めてねえのに。悪いが俺は美里の「血と涙の努力」をたたえて抱きしめるような甘い男子じゃない。よっくその辺、奴だってわかってるはずだ。
「俺なんてぜんぜんやってないんだぜ。でも結果は、俺とお前、並んでるってこと。美里、俺の方が隠れた馬力を持っているって証明だよな。尊敬しろよ」
「ばっかみたい！　貴史だって受験日最後の一週間、私のあげた問題集、必死こいて解いていたくせに！　自慢しないでよ。もう、むかつく！」
「せっかくくれたものを無駄にはしねえよ。俺がやってるとこ見せねえと、お前だってヒス起こすからしかたなくそうやっただけだって。いいかげん気付けよ、ばーか」
　美里はもっとつっこんでくると思っていた。
　言い返さなかった。目を潤ませた。泣いた、ともいえない程度の光がちらついた。あの瞳の潤みは、どうみたって「涙」だろう。男子の俺だってそれはよっくわかる。
　あのときだけは、変だった。
「これからも、ずっと一緒だね」
「しょうがねえだろ、ふたりとも受かっちまったんだから」
　美里は俺を無理やり、はげた街路樹の幹に俺を押し付けた。いきなり喉もとに頭を押し付けてきやがった。わけわからんことを口走った。
「あんたと離れたら、私、本当のこと、誰にも言えないよ、貴史」
　まだ美里は何か言っていた。けどひっくひっくしているあいつの声を、全部聞き取ることはで

きなかった。

　今日まで、美里はめそめそしていた時のことなんぞ、とっくの昔に忘れたような顔で俺に話し掛けてきた。ことを忘れたかのように振舞っていた。
　消しゴムのかすを投げつけあい、どつきあい、げらげら笑いあい。
　ほんっとに、いつも通りだった。
　幼稚園行く前からずっと一緒にしてきたことを続けてきた。

　あいつは、ほんとに忘れてるのか。
　忘れてるわけねえよ。な、美里。
　もし本当に美里が忘れていたとしたら。
　覚えてる俺って単なる馬鹿ってことになる。

　俺とと清坂美里とのつながりは、幼稚園に入る前から始まっていた。いわゆる「幼なじみ」、もっと単純に言っちまうと「腐れ縁」、そんなもんだ。俺んとこと美里の母ちゃんがふたりとも、やっぱし腐れ縁の大親友同士だったんで、その血を引いたんだろうな。
　ＰＴＡ会議なんぞで母ちゃんズがいそいそとデートに行っちまった時は、暗黙の了解でどっちかの家に預けられていた。たいていふたりっきりで遊んでたな。
　そんな付き合いだったから、「一番の仲良しは誰ですか」と誰かに聞かれた時、すぐに美里のを指差すのは、当然のことじゃあねえか？　だって野郎連中の約百倍は一緒にいるんだぜ？
まあ、最近はお互いの友だちづきあいもあるしそれほどひっついているとは思わんぞ。
　けど、美里がやばいことに巻き込まれてるなとか、そんなことを感じ取れるのは俺しかいなかった。俺の明晰な頭脳をもって、ベストな方法を編み出し、「ほら、こうしろっての」命令してやったもんだった。すごいだろ。
　そりゃ、世の中には勘違いする大馬鹿野郎もいる。
　「女とばっかり遊んでいるなんてすけべったらしー！」なんぞと叫ぶ奴もいた。特に四年生あたりがひどかった。さすがに美里と三ヶ月くらい無視こきあったことも、ないわけじゃあない。「好き好きしてる！」とか言われて相合傘を黒板に書かれたことも数え切れない。あまりにもひどい時は、一発二発殴りつけてけりをつけ、母ちゃんが学校に呼ばれ、俺が家でスパルタンパンチを食らうという経験も、そりゃ泣けるほどある。、
　――どうしてそうべったりしてるの？　羽飛と清坂って、男子と女子なのに。
　クラスの連中が「好き」だとか、「恋してる」とかいう言葉で、俺と美里をくくろうとする時、俺はひたすらわめいていたような気がする。
　そんなんじゃない、ただ、わかるだけなんだって。
　美里も俺も、感じることが一緒なだけなんだって。
　他に誰もいないだけなんだ。
　――あんたと離れたら、私、本当のこと、誰にも言えないよ、貴史。

　美里の口走った言葉と泣き顔で、今まで俺が見ないふりしてきたことを無理やり「ほら見ろ、見ろっての！」とか言いながら押し付けられそうな気がする。冗談じゃねえ。
　馬鹿やっている時の二人のままで話せればいい。それだけじゃねえか。

　言っとくけど、美里以外の女子で「すげえ可愛い！」と思った子は、小学校時代かなりいた。俺の好みはとにかく可愛い年下女子、アイドルで言えば現在十一歳子役アイドルとして大人気の鈴蘭優ちゃん！　おとなしそうでいてしっかりもので、男心をどきどきさせてくれる女子ってのは、悪いがあの小学校にはいなかった。
　そういうことを男子連中に言ってみろ、「アホかこいつ！」で終わるに決まってる。
　男子同士、アイドルに熱上げるのは恥ずかしいことだという認識がなぜかある。いいじゃねえか。俺だって男だ、可愛いものは可愛い、どこが悪い！
　その辺、「あんたってロリコンだよねえ」とあきれながらも、わざわざ女子向けアイドル雑誌の優ちゃん切り抜きを「ほら、誕生日プレゼント、感謝しな！」ぽいと渡してくれるような相手ってのが、美里だった。

　グレイの細かいチェック柄ブレザー制服が青大附属中学の正式服装だ。学校に近づいてくるにつれ、おんなじ格好した男子女子が、親連れでてくてく歩いているのが見えた。俺のようにたったひとり、自転車を駆り立てている奴はいない。お坊ちゃまとお嬢ちゃまの集合体なんだろうな。頭に来るのは、みな男子連中、髪の毛伸ばしてる奴ばっかじゃないか！
　親に無理やり「入学式くらいきちんとした印象持たせないとだめなんだよ！」とばかりに、無理やりバリカンで刈られた髪を、中学以降は絶対伸ばそうと決めた。
　パーマかけるのはどんなもんだろう？ おっといだったか、おしゃれ狂いの美里にお伺いを立ててみたんだが。
「貴史、悪いけどパーマ掛けるのは無理無理。校則以前の問題だよ。だって、ブレザー制服ってお坊ちゃまそのものじゃあない？　あんたに似合わないって自覚、あるでしょうが！」
　まあな。俺もそう思う。だ
「美里、お前もよくよく鏡見ろよ」
　俺は黙って、美里をうちのでっかい鏡の前に連れて行き、思いっきり向き合わせてやった。鏡の中にはおかっぱ髪で、前の両脇だけすくった感じでご丁寧にもお下げをこしらえているふくれっつらが映っていた。つんのめるぐらい引っ張って、あとでぶん殴られるのもいつものことだった。

　ネクタイの間に風が忍び込んだ。ひゃん、と冷たい感じがした。いっぱい漕いで疲れてるはずなのに、なんか楽だった。
　日が平たくアスファルトに当たり、砂金掘りをしたくなるような光りがちらついていた。。少し汗かいたみたいで、ペダルを踏む足も心持とろくなったようだ。
　入学式開始時刻は十時のはず、腕時計を見るとまだ九時半になったばかり。余裕だ余裕。

二

二

　あれは確か、小学校卒業前にクラスで動物園に行った時だった。
　俺と美里は合格していたんだが、クラスの女子がひとり落っこちていた。しかもその女子は美里のことべったりで、青大附中に落っこちたことよりも、美里と同じ学校に行けないことの方がかなりダメージでかかったらしい。もっとも美里本人は「詩子ちゃん、別にひっこすわけじゃないんだもん、そんなに泣かなくたっていいじゃない」とまあ、かなり冷めたことを口走っていた。それがたまたまなんかの拍子で例の女子・藤野詩子に伝わってしまい、卒業までの二週間ほど口を利かない状況と相成った。
　それならそれでいいだろ、卒業なんだから。
　だがしかし、俺らのクラス担任は、天敵・沢口先生。俺と美里がこの三年間戦いつづけてきたにっくき野郎。なにかあると俺と美里をつるし上げる三十男ときた。いったい俺と美里に何かうらみでもあるんだろうか。あるんだろうなあ。こいつのクラスで俺たちが内申書ずたずただったにもかかわらず、青大附中に合格できたのは、やっぱりごまかしの聞かない一発勝負、試験成績だろうな。
　俺と美里が青大附中に合格しちまったのがそうとうむなくそ悪かったらしい。
「よし、卒業式前に、お前ら、一緒に遠足に行くぞ！　羽飛も清坂も別の中学に行くんだから、これが最後だぞ。参加しろ」
　だーれが、と思ったんだが、俺らはやっぱり悲しい小学六年生。
「行きたくないわよねえ、なんでよなんで！」
「しゃあねえだろ。さっさと抜け出すぞ」
　家で打ち合わせた後、俺たちはぶらぶらとそれぞれの友だちとしゃべりながら、サルとか虎とかアライグマとかフラミンゴとか見て回っていた。美里はすでに女子連中から浮き上がっていたので、いかにも「社交辞令」っぽい白々しいやり取りしかしてないようすだったが、あれは自業自得だ。あきらめろ。どうせ青大附中に入ったらすべてきれいにおさらばなんだからな。あいつのことだ、今のべたべたうっとおしい女子連中よかずっとましな友だち、できるだろ。

　さくの向こうであひるの群れが激しく鳴きわめいていた。えさの時間がからんでいたのかもしれない。とにかく一緒にしゃべっている相手の声も聞こえなくなるくらいだった。たまたま隣にいた友だちと、
「うるせえな。騒音公害だなこりゃ」
「だよな、だよなあ」
　耳をふさぎ、鼻をつまんでた。もちろんあひる連中に抗議なんてする気さらさらない。ただなんとなくってだけだったのに、いきなり奴が口を出してきやがった。
「そうか、羽飛でもそういうことを考えることがあるんだな」

「は？」
「お前らの態度も、今のあひると一緒なんだがな」
　隣には沢口がいた。わざわざ俺のしゃべったのを聞きつけて近づいてきたらしい。
　あきれはてたように、俺の答えも聞かぬうちに吐き捨てて立ち去った。
　――そんなまずいこと言ったかよ。最後の最後までうっせえ奴だ。
　俺は目で思いっきりエネルギー衝撃波を送りつけてやった。

「醜いあひるの子の暗い話を聞いたことあるか？」
「ねえーよ」
　帰り道、沢口は俺たち六年連中を前に、いきなり脈略もなく話し始めた。
「本当は白鳥だった、醜いあひるの子は美しい白鳥になるはずだった。アンデルセンの童話ではな。だが、それは間違いだったんだな。アンデルセンの童話では、『あひるの子』は『白鳥の子ども』だったんだ。しかし現実は残酷だった。あひるの子はしょせんあひるでしかなかったんだ」
　全くわけわからねえ。この段階で三分の二は速攻、寝たと思う。俺も同じだった。
「ある日みにくいあひるの子は,催眠をかけられてしまい、自分を白鳥だと思い込んでしまったんだ。ある日、同い年の白鳥が、催眠にかかったあひるの子と出会い、真実を話すべきかどうか迷ってしまう。でもそれができなくて、白鳥は自分があひるの本来の姿だと偽って,演技をしつづけたんだ。結局のところ、醜いあひるのままだったけれど、催眠にかけられ、自分の姿が白鳥のままだと信じ込んだあひるは、苦しみも悲しみも感じずに一生を終えたという」
　なあに気取ってるんだか。悪いがそんなロマンチックぶってる沢口の言葉なんて、他の連中だあれも聞いてなかったぞ。俺だって美里だって、最初っから無視してたんだ。沢口が言葉の途切れる合間に、俺を何気なくねめつけるまではな。

　後で美里に、
「さっきの話、聞いたかよ。沢口の奴、いったい何を言いたいんだ？」
　同じ立場の者として、意見を求めた。美里は全く気がついていないようだった。
「別に、何も聞いてなかったけど。また寝言言ってるんだって無視すればいいじゃないの」
「けどな、あいつ一言一言言い終わるたびに、俺をやらしい目で見るんだぞ」
「あいつそういう趣味なのよ。貴史、逃げられてよかったね」
　おいおいちょっと待て。俺は美里の頭を思いっきりはたいた。
「よっく考えろよ、なんもわからねえのかよ。沢口が言いたかったのはな、俺たちが青大附中に行くなんてしょせん、あひるが白鳥の湖にぽっちゃんって飛び降りるのと同じことだってこと、言いたかっただけなんだぞ。あの野郎、よくもまあな。どうする美里、お礼参り、やるか？」
　ねぼけた顔で美里はやっぱり、ぼけっとしたまま答えた。
「いいじゃないの。あひると白鳥、仲良くやってけば。貴史もめずらしいね。そんなたとえ話にかっとなるなんて。ほんとばっかじゃないの。そんな暗い話するよか、卒業式終わったらさ温

泉旅行貴史のうちと一緒に行くらしいよ。それ、聞いてない？」

　ったく、どっちがばっかなんだか。
　沢口の奴は俺たちが青大附中に行くことを、「白鳥のみずうみにあひるが飛び込む」のと同じだって言ったんだぜ！どうせ俺たちはがあがあうるせえあひるなんだから、白鳥のどっさり泳いでる青大附中では浮いちまうに決まってる、ざまあみろってな！　ばかにしてるよな。美里、お前頭にこねえのかよ！

三

当然、俺は学校に、うちの親たちよりも早く到着した。
学校から送られてきたプログラムで見たところによると、四月五日にまず中学の入学式が行われるんだそうだ。次の日が高校。最後の日が大学となるんだとか。だから見渡す限り、目に入る殆どの連中は、みな俺と同じような格好した奴ばっかりだった。あえていえば、父ちゃん母ちゃんのオプションがくっついていないかどうか、くらいだろうな。どの生徒にもめいっぱいおしゃれをしたどこぞの母親たちがみな、制服姿の連中に寄り添っていた。
ちなみにその間、在校生はみな休みになっている。ガンつけられる心配も、今のところはない。
「要くん、ほら、お母さんも一緒だから、怖がらなくてもいいのよ。入学式だけがまんしてなさい。教室に入っても一緒にいるからね」
通りすがりの親子連れから聞こえてきた会話に、俺は耳をそばだてた。
「要くん」とはだれぞや？と横目でにらんでみると、そいつはめがねを掛けたちんまい男子だった。うつむいて頷いてやがる。こいつほんとに俺とおんなじ歳かよ？
なんだか受験のために二人三脚してきましたって感じの親子だった。あれで、やっていけるのかよ。ああいう奴と同じクラスにはなりたくないよな。誰か母親代わりにあてがわれる哀れな女子が出てきそうな気がする。まず美里は逃げるだろうな。
青大附中入学式・親子ウオッチング、その二を楽しむ。さらに目だっている親子をチェックした。
今度は女子だ。袖先がたっぷり手の甲にかかっているブレザーに、赤い蝶ネクタイをきっちりと結んでいる。両親揃ってなにやら語らっていた。門のところで父親らしき人が、カメラを片手に母ちゃんと娘の位置を指示している。家族撮影、狙っているのだろう。残念ながら親切な奴を捕まえられないので。
「ほらほらふたりとも、べっぴんさんふたり、ちゃんと並んで」
「可愛く撮ってあげてね」
父親と母親の会話もかなりぶっとんでいるが、男子っぽく短い髪の毛の女子はあっけらかんと言い放っているではないか。
「可愛いだけじゃ能がないじゃん、父さん、ほら、もっと色っぽく、男子全員が私の笑顔ですっきり『抜ける』ように撮ってよね！　いい男いっぱい捕まるように！」
――こいつ、何考えてるんだ？
注意しろよ、公衆の面前だぞおい。でも両親ともども全く叱るそぶりもなく、笑顔のままシャッターを切っていた。
うっかり通ったら、「すみません、シャッター押してもらえますか？　三人で撮りたいんですが……」とか言われて捕まりそうだ。「抜ける」などとほざいたその女子の顔が鈴蘭優ちゃん

なみの可愛い子だったら話は別だ。だがしかし。はっきり言おう。真昼間からああいう下ネタ言い放つ女子は好みじゃあねえ。女子はなんだかんだいって、控えめにしろと俺は言いたい。んなこと言ったら美里に張り倒されるだろうが、それは俺の趣味だ。
　しばらく自転車置き場を探した。車は駐車場いっぱいに並んでいたが、自転車専用の場所は見当たらなかった。白いライトバンと鷲のマークが目だつ車の間に、自転車を忍び込ませた。

　クラスが何組なのかをまずは調べなくては話にならん。
　学校からもらったパンプレットによれば、受け付けで名乗って、係の人から自分のクラスを教えてもらうようにという話だった。仰せのとおりにいたしましょうってことで、俺は生徒玄関で靴を履きかえ、そのまま「新入生受付」の紙がぶら下がっている机へと向かった。そこにはふたり、たぶん大学生くらいの女の人が座っていた。なんで大学生かと思ったかっていうと、制服着てなかったからだ。
「お名前は？」
「羽飛、貴史」
「はとばたかし……さんですね。はとばとはどのように？」
　中学一年に対して大学生がここまで丁寧だと、なんだかえらくなったみたいでかゆい。堂々と答えてやった。
「はねの羽に、とぶの飛」
「珍しい苗字ですね」
　さすがに「まあな」とは答えられない。黙ってその大学生が机に敷いている紙を指先でなぞり、ふっと留めて答えてくれた。
「ありました、Ｄ組です。この廊下を左まっすぐ行って、四番目の教室です。場所わかりますか」
　たぶん受験の時の教室とほぼ変わらないだろう。俺は悪いが方向音痴じゃあない。
「大丈夫っす、どうも」
　当然と答えてやった。受付のあるでかいホールの左側に向かい、まずは教室の表札を眺めながら探していった。Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄと続いているはずだ。確か青大附中はクラスが四クラスしかなくて、アルファベットで分けられていると聞いている。かっこいいぞこれ。公立中学だと全部数字の１、２、３、４だぞ。小学生のまんまでガキくさいよな。やはり、附属だ。Ｄ組かあ……ん？
　歩き始めてから初めて気がついた。調べときゃよかった。
　美里のクラスだ。「清坂美里」なんて名前も、そうざらにあるもんじゃあねえ。

　Ｄ組の前はドアが開けっ放しだった。まずは首出して覗き込んでみた。白っぽい光が差して顔がよく見えない中、制服のネクタイとリボンだけがやたらと目に飛び込んできた。まだ到着したのは半分くらいなんだろう。わやわやと大人の声もする。と、
「たかしっ！」

　誰だ、俺の名前呼ぶ奴は。ああ、ひとりしかいない。すぐに声の方を振り返った。目がすぐに慣れて、目の前の美里を発見した。廊下側から二列目、前から三番目。ちょこんと椅子に納まってるじゃないか。
　いや、それはいい。問題は美里の頭だ。思わず指差して叫んでしまった。
　確か昨日までは肩まであったはずなのに、今の美里はすぱっとあごのとこまで切り落としてしまっている。結びようのないくらいの短さだった。
「お前、ねえぞ、髪の毛」
「切ったに決まってるじゃない。ないなんて、変なこと言わないでよ！」
「ったくお前もＤ組かよ、まじかよ、ったく腐れ縁もいいとこ……」
　いつもならまぜっかえすんだが、いやしかし、今はできない。机の隣で、美里んとこのおばさんがにっこり手を振ってるからな。もっとも、思いっきりいいとこの奥さんっぽい顔しているのは見え見えだ。おばさんだっていつもだったら、「あーら、今日も男前ねえ、たあちゃん！」くらい言われて、背中をばしんと叩かれるだろう。
「あ、こんにちは」
　周りの視線が俺と美里に集まってくるのがなんかわかる。美里の顔をのぞくと、かなりぶんぶんふくれている。さては親子喧嘩一発やらかしたか。けどな、とばっちりは食いたくねえぞ。
「たあちゃんと同じ組で、美里、よかったね。安心したわ。これからもうちの美里と仲良くしてやってね。あら、お母さんはどうしたの？　いらしてるんでしょ」
　おかめ化粧で手間取ってるなんて誰が言えるか。適当な言い訳を探して天井を見上げている間に、美里が助け舟を出してくれた。
「お母さんってば、もういいかげんにしてよ。さっさと父母席に行ってよ。ここ教室なんだもの、あんまり親とくっついてたらばかにされちゃうんだから！」
　そりゃそうだわな。早く追っ払いたいわな。それでもまだ未練ありげのおばさんは、俺をちらちら見ながら、
「でも、たあちゃんのお母さんがくるまではここに居たっていいでしょう？」
「あ、うちの母さん、たぶん遅いと思うし」
「だよね、だよね。だからお母さん、早くどっか行っててよ。邪魔なんだから！」
「いいじゃないの、まだ子どもなんだから」
　ちっとも動じないといった態度で美里んとこのおばさんは、俺にもう一度片手を振った。
「じゃあ、たあちゃん。美里のこと、よろしくね。お母さんと一緒に会場にいますからね」
　くくく、と後ろの方で笑い声がした。知らない女子がにやにやしながら俺たちの脇を通り過ぎていった。どっかで見たことある顔だと思ったら、なあんだ、あの下ネタ連発の、家族撮影中だったあいつだ。へえ、同じクラスなんだ。

　自分の親だったらけり入れていたかもしれないが、他人の親だったらなにされたって知ったことじゃねえ。おばさんが出て行った後、美里は机を叩きながら俺にささやいた。
「あんた、一人で来たの。おばさんたちと一緒じゃなくって？」

「だって母ちゃん、化粧にやたら手間取ってるんだぜ。無駄なことをしてるんだ。あんなのに付き合っててみろ、絶対入学式間に合わねえぞ」
「いいよねえ」
　うらやましそうため息をついた。
「今の見たでしょ。うちの母さん。朝からあんな調子よ。うっとおしいったらありゃしない。どこかのお金持ちマダムみたいな気分でいたいみたいよ。何考えてるんだか『おかあさま』と呼んでよ、とか言い出すんだから。たかが青大附中の入学式くらいでなにが、おめかしよ。他の奴がどうだか知らないけど、気取るなんてちゃんちゃらおかしいと思わない？　たった一週間くらいで、私のどこがお嬢さまになるってわけよ。あんたもそう思うでしょ、貴史」
「単に、お前のこと気が気でないんじゃねえか。また誰かを一発ひっぱたいたりしねえかとか、スカートめくられたとかで野郎を半殺しにするんでないかとか」
「誰がそんなことしたっていうのよ！　すっごく失礼！」
「怒るな怒るな。どうせ美里、女子だから面倒見られてもそんな恥じゃねえだろ。おいおい、それよかな、さっきさあ、すげえ親子見たぞ」
　もちろん、後ろの方に鎮座ましてる「下ネタ女子」のことではない。
「どう考えても俺たちと同じ十二歳だと思うんだが、親にな、ぼくちゃんぼくちゃんって感じでな、なでなでされてるすげえ過保護な男子を発見してな……」
　言葉を飲み込んだ。噂をすればなんとやら。俺たちの脇を通り過ぎたのは、あの、過保護な会話を交わしていた、めがね面の小柄な男子じゃねえか。お母さんらしき人は、美里んとこのおばさんとは違って、水色のふわふわした感じの服着て、やっぱしかいがいしく息子の面倒を見ている。俺が説明しなくても、たぶん美里にはわかるだろう。目で合図すると美里も息を殺して見つめていた。
「いい？　要くん、お母さんぎりぎりまでいっしょにいますからね」
　言葉はなく、その「要くん」は廊下側一番後ろの席に座り、水色母さんの言うことに頷いていた。美里のようにいきりたって追っ払おうとする気配もない。
　美里はずっとへばりついている水色親子を見つめたままだった。口からは
「うそお、いるんだ、ああいうのって」
　言葉がもれた。だろだろ？、の意を俺は美里の机を指先で叩いて伝えた。
「『百聞は一見にしかず』、って、試験に出ただろ」
「ほんとだわ」

　腐れ縁でもやはり男子と女子。ずっとくっついていてもしょうがねえ。ということで俺は自分の席がどこだか探した。五十音順に並んでいるらしい。俺の苗字は「はとば」だから「はひふへほ」の「は」。窓際の二列目、真中あたりじゃないか？　机の左端にフルネームで名前のシールが貼ってあるのでそこをチェックしていった。川の字にならんだ席の間をすり抜け、後ろから二番目の席にたどり着いた。あれ、「は」以降の名前って俺以外にひとりしかいねえのか。
　まずは学校指定のかばんを置き、よっこらしょと腰をおろす。

　それから新品のカンペンを取り出した。別に俺は今までのもんでいいと思うんだが、うちの親たちが黙っちゃいなかった。このあたりはぴかぴかの一年生ときた。もっともかばんには筆記用具以外なんも入っていない。まずは一年Ｄ組の同級生になるであろう連中の顔をまじまじと眺めることにした。
　俺が来た頃にはまだ半分くらいしか揃っていなかったんだが、今見ると三分の二くらい席が埋まっていた。初対面だと思うんだが、中には集団化してしゃべくってる奴もいる。俺の二つ前にいるキツネっぽい髪形の男子が、やたらと愛想を振り撒いてにやにやしているのが目だつ。同じ小学校から来たんだろうか。ま、俺もさっきまで美里としゃべっていたんだし、おあいこだな。でもまあ、そんなあせらなくたっていい。俺はこれでも友だち作るのは得意なんだしな。

　緑色の黒板はぴっかぴかだった。小学校の黒板がもろ「黒い板」に見えるのにまさに明るいグリーンって感じだった。ほんと、今まで俺たちが通っていた学校とは違う世界なんだなってことを思い知らされたような気がする。先生の使う机の上には、なぜかばらの花が飾られていて、なんだかやばそうな雰囲気が漂っていた。いや、変なこと考えたんじゃなくてな、いわゆる「サスペンス劇場」に出てきそうじゃねえか。これも小学校の頃なんて、気の利いた女子がたんぽぽやら野草を摘んできて、瓶にさすのがせいぜいだ。一本二本ではない。三十本くらいたっぷりとばらの花を生けるなんて、見たことねえ。
　床もつるつるして、なんかちょっとだけやわらかい。その他傘掛けやロッカーも木で出来ている。木目模様の入っていないものといったら窓ガラスと柱時計、あと窓辺でしっかり場所を取っているＯＨＰくらいのものだ。
　かばんをどけて机を撫でてみた。入試の時も思ったんだが、机は白っぽい木でできている。もっともこちらは新品ってわけじゃあない。以前使っていた奴が彫刻等で彫ったんだろう。「Ｓ・Ｈ」だとか「Ｈ・Ｈ」だとかいろいろとイニシャルが残っている。もっとも下敷きが必要なほどにはでこぼこしていないとこが、やっぱし、「お育ちのよさ」ってもんだろう。
しかし、よくよく触ってみるとかすかに鉛筆で書き込みが残っている。なんだこりゃ。
　――数学のＫの奥さんは、すっごい美人！　いったいどこでひっかけたんだか。あの顔で。
　――社会のＨはただいま彼女募集中！　先生＆生徒恋愛を目指すそこのあなた！　チャンス！！
　以前この机を使っていた、おそらく女子の先輩殿がが残した噂の種だろう。悪いが俺は女子と違って、そんなことできゃあきゃあ騒ぐほど暇じゃねえ。とりあえずは頭に納めておくことにする。数学のＫ、社会のＨ。美里にあとで話しておいて、探偵ごっこしても面白そうだ。

　さて、後ろの席を振り返ってみる。
　真新しいかばんがいつのまにか机の上に置きっぱなしになっていた。とっくに来ているってことか。まだ席には戻っていないらしい。けっ、いたら少し受験の思い出話にでも花を咲かせるつもりでいたのにな。しょうがない。後ろがだめなら前の席。いたいた、さっそく声を掛けてみた。

「よお、どこから来た？」
　俺の質問は当然、「どこの小学校から来た？」って意味だ。
　当然、「ああ、俺のがっこは〜〜小学校だ」って返事が返ってくると期待するもんだ。
　なのになんでだろう、こいつから返ってきたのは、
「祭事町だけど」
　もうひとり一緒にいた奴も、
「俺は霧多町」
　なんでこいつら、町の名前を出すんだろう。まあ遠いことは遠い。悪いがこいつら、絶対汽車通学せざるを得ないだろう。青潟駅から一時間以上はかかる場所だぞ。今朝は何時に家出てきたんだか。
「おめえら、すげえところに住んでるな。どうやって通うんだよ」
「下宿だよ」
　下宿ってなんだ？　聞き返すと、
「俺たち、同じ下宿屋なんだ。塾で一緒だったしね」
「一人暮らしするのかよ！」
「でなかったら、通えないだろ。下手したら帰りの汽車、なくなっちゃうしさ」
　よくわからねえ。しばらく俺と前の席ふたりとはかみあわない会話が続いた。だいたい頭の中を整理してみたところによると、そいつらは塾で知り合って以来の友だち同士。一緒に合格した暁には同じ下宿で青大附中生活をはじめようと決意していたんだそうだ。もちろん親の了解の上。ちなみに下宿は食事は殆ど用意される。一人暮らしと言っても、下宿のおじさんおばさんがいるから、それほど羽が伸ばせるわけでもなさそう、ということだった。

　かなり盛り上がっていたのに、なんで気が付いたんだろう。俺の背後がやたらとあったかい。ちらっと振り返った。顔を見ようとしたけど、相手は伏せているんで表情はわからなかった。俺と同じグレーのブレザー制服姿で、だいぶだぼついている袖口もそっくりだった。もろ服に包まれているって感じだった。「は」よりも後ろの苗字になるそいつは、面接受ける時と似たようなやり方で椅子に腰掛けた。すぐに前の席連中がひそひそ話しこんでいる。
「模試の時に見たことあるよな、あいつ」
「へえ、受かったんだ」
　模試ってなんだ？　まずはそこをつっこんだ。
「模試なんて、俺受けたことねえよ。なにそれ」
「お前受けたことねえの？　模擬試験って、あるだろ、青潟大学附属中学受験模擬試験って、しょっちゅうあっただろうが」
　悪いな、俺は塾にも行かずに受かった、結構すげえ奴なんだ。胸を張ってやる。誰も反応しねえ。けっ、まあいっか。しかたないので後ろの席の奴について、話を戻す。
「けどさ、模試で見かけたのって、あいつだけじゃねえか。俺、見てねえぞ」
　下宿コンビはふむふむと頷きながら、さらに噂話を加速させている。聞こえないわけじゃなか

ろうに。俺は目立たないように靴の紐を結ぶ振りをしてちら、ちらとそいつの顔を覗き込んだ。意地になって顔伏せてるみたいだった。そのまんま黙ってかばんから学校案内のパンフレットを開き、目を通していた。なんでそんなもん持ってきてるんだろう。よくわからん。めくるたびに不ぞろいの前髪が揺れてるのが見えた。他の奴とは違い、いかにも「床屋行ってきました！　校則違反ゼロ！」って感じにぴっとそろえた髪形じゃない。高校生っぽい雰囲気だった。
　それにしても唇をぎゅっとかみ締めて、ずっとパンフレットに熱中しているのはなんでだろ。そんなにお前、「青大附中」の歴史が面白いか？
　とてもだが、声をかけられる雰囲気じゃあない。
　無視してほしいんだろうな。まあいい無視無視。
　そいつについてはまだ噂が飛び交っている。俺はまず情報を集めることにした。
「なんだか、妙に目立ってて、覚えていたんだけど名前は知らない」
「俺の苗字が『はとば』だから、『は』以降の頭文字だってことは決定だろな」

　扉が元気よく開いた。紺の背広を羽織った、たぶんこのクラスの担任教師が登場した。
　俺にとって、一番のチェックポイントはそこだ。
　担任との相性は学校生活すべてを左右する。小学時代後半三年間、俺と美里が沢口と戦った日々で学んだことだった。甘くみねえぞ、まずはどんな奴かじっくりと判断してやるぞ。
　先生はさっそく、緑色の黒板に白いチョークででかでかと「菱本守」と書き、そのとなりにわざわざふりがなを添えた。「ひしもとまもる」。別に振らなくたって読めるだろうになあ。チョークを置いて、手をぱんぱんと打って、俺たち生徒に向かい、教卓にかがみこんだ。
「お前ら、青大附中入学、おめでとう！」
　――お前らときたかよ。
「俺は、菱本守だ。青大附中一年Ｄ組の担任だ！」
　――いや、それはわかってるって。何もそんな歯を剥き出しにして笑顔出さなくたってなあ。
「今日から三年間、お前たちと一緒に歩いていこう。そこんところ、よろしくな」
　――歩いていこう、たってなあ。
　見かけはかなり若い。たぶん天敵・沢口と同年代じゃねえかと俺は思う。うちの父ちゃんよりははるかに若いと感じる程度なので年齢は読めない。なんて思ってたら、あっさり菱本先生の方から自己紹介をどんどん進めてくれた。いいぞ、いけいけ。
「まずは俺から自己紹介だな。俺は今年二十八歳、教師歴としては五年生だ。見た目が若いとよく言われるぞ。おい、一番後ろ、お前、俺の歳どのくらいだと思ったか、言ってみろ」
　――俺に当ててくれりゃあいいのに。
　菱本先生が指したのは、「は」以降の苗字の持ち主だ。答えに困っている様子だった。そりゃそうだ。当てる自信、ねえもんな。俺の予想はだいたい当たったな。沢口よりめちゃくちゃ若い。無視されたのなんてたいしたことねえ、って顔で菱本先生は続けた。
「お前ら、ずいぶん顔ががっちがちだなあ。合格発表が終わってからの一ヶ月近く、周りから『青大附中は厳しいぞ』とか『がっちがちだぞ』とか『勉強で尻叩かれまくるぞ』とか脅されてき

たんじゃないのか？　そうだろうな、そうとう、受験やつれすごいぞ。でもな、この学校、外はがっちがちだが中はふんわりなんだ。もちろんしっかり勉強はしてもらわないとまずいけどな。青大附中の校風、それと面白さっていうものは、お前らにも少しずつわかってくるはずだ」
　楽しそうな口調だった。ひとり浮かれている。
「もちろん勉強は大変かもしれない。そこんところは嘘じゃない。公立の中学に行った友達と比べたら、そりゃ驚くだろうな。ふつうだと高校で習う問題を、お前たちは一年の内に習うかもしれないんだしな。けどな、お前ら、勉強のほかにもやることがたくさんあるぞ。委員会だろ、それから部活だろ。そうとう忙しくなるぞ。二束のわらじどころじゃない、三足も四足も履かねばならないだろうな。詳しいことはおいおいわかると思うが、これから始まる燃える生活を楽しみにして、今から入学式に臨んでくれたまえ！　ほらほら、後ろの君、暗い顔をしているのは、もったいないぞ、もっと元気に、しゃきっとしろ」
　明るすぎる笑顔で締めくくり、菱本先生は手元に用意していたプリントを前列の席に配り始めた。受け取った人はそれぞれ、後ろに回す。俺も西洋紙にインクの匂いが残る「学級通信」を一枚受け取った。ひとり菱本先生の熱い言葉をぶつけられた、哀れな生徒に後ろに相手に渡した。無表情のまんまだった。

　学級通信第一号「パッション！」の内容は、たった今菱本先生が熱く語ったものを、親たち向けにお上品な書き方に改めたようなものだった。新しい情報といえば、
「私、菱本守も、青大附属の卒業生としていつも感じることなのですが」と、
　――へえ、こいつもこの学校の卒業生だったんだ。
　熱いはずだ。きっと楽しかったんだろう。少なくとも沢口タイプのいやみったらしい教師とは違うようだ。まだまだわからんが、俺の勘ではこの「二十八歳・彼女いるかどうかわからない・菱本守」先生とうまくやっていけそうな気がする。だってこんなわかりやすい奴、もし同じクラスの生徒として出会ったら、すぐに打ち解けて盛り上がったと思うもんな。
　教師運、大吉。めでたいぜ。

「では青大附中一年Ｄ組、初めての出席確認だ。いくぞ！　まずは、いのうえくにひこ」
　男子はイ行から始まった。三十人。男子十五人、女子十五人。無難に「はい」と返事をする連中がほとんどだが、
「すいぐち、かなめ」
　声が小さすぎる奴もいた。すぐに菱本先生は繰り返す。
「すいぐち、ほら、男だろ、しっかり返事しろよ」
「……はい」
「よっし、これから少しずつ、腹から出すようにしていけよ。がんばれ」
　なにががんばれなのか。よくわからん。見るとそいつはさっきの「水色ドレスのお母さん」と一緒にくっついていた「過保護なお坊ちゃま」だった。
　俺のふたつ前に差し掛かった。

「なぐも、しゅうせい、いるか」
「はーい！」
　確かずいぶん髪の毛をだらだらに長くしてすぐに他の連中としゃべっていた奴だった。後姿しか見てないが、きざっぽく敬礼している。
「ほお、いいぞ、決まったな」
「よろしくお願いしまっす！」
　あっという間に俺の番だ。しかし菱本先生つっかかったのか、俺の苗字を呼ぼうとしない。これは一つの理由しか考えられない。たぶん、俺の苗字、読めねえだろ、先生。
「すんませーん、『はとば』なんだけど読めますか？
　助け舟を出してやると、菱本先生は頭を掻きながらまたにやにや照れ笑いした。クラス一気に初めての大爆笑ときた。笑う門には福来る、めでたいぞ。
「これで『はとば』と読むのか。めずらしいなあ、お前」
「まあ、そんなとこ」
　似たようなことを何度も聞かれてきた。受け付けの人も同じことを言っていた。確かにこの苗字は珍しい。くるっと何人かの男子、および女子が俺の方を振り向きにやついていた。見ると、さっきの下ネタ女子も俺にいきなりピストル持った真似してウインク送ってきてるじゃねえか。まあ、悪いことしたわけじゃねえし楽しいから、俺もピースサインを送っておいた。さて、最後の一人となった。
「たちむら……おい」
　またも菱本先生口篭もる。俺みたいに助け舟を出そうとしないんで、五秒くらい沈黙が続いた。そのうちじっとにらむような視線でもって、菱本先生は俺の後ろに声をかけた。気弱そうな口調が笑えた。
「たちむら、でいいのか」
「りつむらです」
　声は細く、かすれていた。
「名前は、かずさで、いいのか」
「はい」
　――男につける名前じゃないよな。俺は貴史でよかったぜ。
　俺の知る限り「かずさ」という響きの名前は、女子にしかつけないもんだと思うんだがどうだろう。少しざわめいたのをきっかけに俺は振り返った。さっきまでずっと机とパンフレットしか見つめていないあいつの顔をしっかと確認しておきたかった
　あまり、自分の名前が好きじゃないのだろう。唇をかみ締め、真っ白い顔をすっと上げ、真正面からきついまなざしを投げつけていた。鋭すぎて、けんか売っている風に見えた。せっかくガンつけてるのに迫力がないのは、「りつむら」の顔がお上品すぎるからだろう。別の言い方では「女子っぽい」とも。奴は俺をガンつけ延長の視線でちらと見た後、今度は学級通信に目を通していた。そうとう、文章読むのが好きなんだな、こいつ。
　菱本先生は名前の呼び方について納得したらしく、さっさと切り上げた。次は女子をひとりひ

とり読み上げ始めた。
　美里が「きよさか、みさと」とすんなり呼ばれ、手を上げて「はーい！」と返事していた。

　その後すぐに配られたクラス名簿で、俺はそいつの名前が「立村上総」だということを確かめた。

三

四

　入学式入場前、廊下に二列で並ばされた俺たちは背の順に並べ替えられた。
　どちらかいうと、男子よりも女子の方がでっかい奴が多かった。横ではない、縦だ。
「おい、お前、前に行け。うーんお前らふたりはなあ……」
　菱本先生は俺と立村の頭を交互に撫でまわしながら、
「とりあえずお前、前に来い」
　俺を立村の前に押し込んだ。席と同じ順番だ。後ろからだいたい四番目。少々納得いきがたいものもあるのだが、そこんところは飲み込んだ。立村は髪の毛がそれなりに生えててふくらんでいるが、俺はかりかりのスポーツ刈りでごまかしがきかない。そのあたりしか理由が見つからん。まあいい、逆転の機会はあるだろ。
　美里より俺の背が高いのは当然だ。男女の列で並びあうわけがないとは思っていた。あいつどの辺か、と女子列を目で追うと、前から五番目くらいのとこに突っ立ってた。俺が思っていたよりも、あいつはちびだったんだな。

　さて俺の隣にきた女子と目が合った。ブレザーのボタンが腹のところでぴちっとくっついていた。他の奴らを見る限り制服がぴったり身体に合っているなんてめったにいなかったのだが、その女子だけは違った。みるからに、ぱんぱんだ。
　向こうからにこっと笑ってきたので、俺も一言、
「よろしく」
　と渋く決めてみた。やはり第一印象は、大切だよな。するといきなり
「清坂さんと同じ小学校なんだよね」
　いきなり話し掛けてきた。美里の苗字をすでに覚えているってのがすごい。まだ前の列が動いていないので、俺もつきあってしゃべった。
「あいつと俺だけなんだ、うちの小学校から受かった奴」
「そうなんだ、でもいいなあ、仲がよさそう。羽飛くんだっけ？」
　なんと俺の苗字も覚えている。
「そんなに俺、インパクト強かったか？」
「そりゃあもう」
　大福餅に目の部分だけへこませたような顔で、隣の女子は笑った。
「だって、男子と女子、いきなり仲良くおしゃべりしていたのって、羽飛くんと清坂さんくらいだよ。ああ、いいなって思っちゃった。楽しそうで」
「あいつと俺とが特別なだけなんだ。あ、言っとくが付き合ってるとかそういうんじゃねえぞ」
「うんうん、わかるわかる。私も男子の友だちたくさんいるから、よっくわかるよ。そうだよね。楽しいよね」

　意外とこいつ、話が合う。一方的に名前を覚えられているのもなんなので、俺はその子の胸ポケットに縫い付けられている金色のネームプレートをちらと見た。「奈良岡」と黒く彫り込まれていた。
「羽飛くんが席に戻ってから、清坂さんと話をしてたんだよね。楽しそうな人ってきっと楽しい人だから、きっと友だちになれるかなって思って。美里ちゃんいい子だよね」
　なんと、もう奈良岡は「美里ちゃん」と「ちゃん」付けで呼んでいる。
　あんなに俺に張り付いていたくせに、離れるやいなや、あっさり女子友だち作って盛り上がるとは、なあんだ美里も心配する必要なかったじゃないか。
「ちゃん付けしているとこ、悪いけどな。美里の性格は見た目よりも過激だぞ」
　列が少しずつ動き出した。階段のところでまた止まった。
　女子としゃべっている美里の方を見ながら歩いた。
「つきあうとかつきあわないとか、そういうの関係ないんだって清坂さんも言ってたよ」
「気の合う奴としゃべるだけなんだから、男子でも女子でも関係ないだろ」
「うんうん、そうだよね、わかるわかる」
　ほっぺた大福餅女子・奈良岡は次に、俺の後ろへ視線を移した。おそらく立村だろう。少し遠慮がちに尋ねている。俺もつられるような感じで振り返った。やはりあいつ、うつむき加減のまんまだ。さすがに手元には本がない。文章読めないからごまかせないで困っているようだ。
「品山小学校なんだって」
　立村は頷いた。なにか口篭もるように、無理やり笑おうと頬をひきつらせていた。もろわかる、「つくり笑い」だ。
「一緒に受けた人、他にいなかったの」
　奈良岡も俺に対してするのとは違って、かなり戸惑っているようすだった。
　低い声で、目を足元に向けるようにして、ようやく立村は答えた。
「受験したのは俺だけ」
「そうだったんだあ」
「三年ぶりにうちの学校から受験したんだ」
　そうか、じゃあ友だちいないわな。俺は心でつっこんだ。奈良岡はまだしつこく粘っている。
「そうなんだ、小さい学校だったんだね」
「二クラスだけだった」
　奈良岡がにっこり笑顔で話そうとするのに、立村は消えそうな声で苦しそうに答えていた。せっかく楽しくやろうぜと盛り上げようとしている奈良岡には悪いが、立村という奴、かなりのりが悪い。もうそろそろ解放してやったらどうかと俺は言おうとした。すると、
「おーい、もしもーし」
　立村の後ろから一声かかった。どっかかっこつけたような言い方、聞き覚えがあった。立村が一瞬振り返った。奈良岡もひょいと視線を後ろにずらした。
「はいはーい」
「そ、こ、の。お嬢さん、新入生インタビューはぜひ、この俺にもお願いできませんかねえ」

「名前なんだったっけ、ええっとええっと」
「覚えてくれてなかったんですかあ、そりゃあ残念。それじゃあ言ってきかせやしょう！」
　――なんだよあいつ。
　そんなの聞く気にもなれなかった。階段を下りて体育館前廊下で入場を待ちながら、俺は立村へ話し掛けてみた。奈良岡はすでに立村後ろのきざな喋り野郎のインタビューに回っていた。立村みたいな奴には、それなりの話し掛けるコツってのがある。俺だってそのくらい、小学時代でマスターしてるんだ。女子にはそこんとこ、やっぱしわからないべな。

　ゆっくりゆっくり前に進む。けどまだ動かない。体育館入り口はやたらと冷える。手をすりすりしながら俺たちは入場指示を待っていた。みんなそれぞれ隣、前、後ろと適当に話し掛けて友だちをこさえようとしている。俺もそうだ。背中にいる立村にあらためて声をかけた。まずはさっきと同じパターンで。やっぱし塾だろな、こいつも。
「お前さ、どっか塾行ってたっけか」
　立村はきょとんとした顔でしばらく黙っていたが、俺の顔をちらっと見て、
「うちでひとりでやってたけど」
　口先で素早く答えた。そうそうびびらなくてもいいじゃねえか。笑顔でもっと聞いてみる。
「俺と同じじゃねえか。俺も一度も講習会だとか塾だとか行ったことねえけどな。ほら、さっき他の奴がお前見て言ってたぞ。模擬試験を受けた時顔見たことあるってな」
「模擬試験、ああ、一度だけ」
　またか細く答える立村。すぐに目をそらそうとする。無理に話をやめたそうにする。そうはさせねえ。これから付き合いは長くなるんだ。俺の腕が鳴る。
「で、今日は、親と来たわけ」
　ずっと伏せ目だった立村が俺に向かって初めて正面から答えた。
「普通、そんなものかと思っていたけど」
　二重まぶた、一重まぶたっぽく見えた。うまく言えねえけど、日本人系の顔ってとこだった。目だつわけじゃないんだが、礼儀正しく坊ちゃんっぽい雰囲気がする。俺とは別世界の奴だという気はするが、それでもまだしつこく話を持っていく。
「へえ、じゃあ、家族記念撮影なんてしてなかったってわけだ。えらい、えらい」
「そんなのしている人いたのかな」
「いたぞ、校門でピースしてる奴とかな。うちの父ちゃん母ちゃんそういうの大好きだし、俺は入学早々恥もかきたくねえし、じゃあってことで先に一人で到着ってわけだ」
「これから毎日通うんだから、そんな目だつことしたくないよな」
　妙にふむふむ納得している。小さい声だが、俺と会話は成り立っている。
「まっとうな中学生だよなあ、お互いに！　立村って、言ったよな。」
　俺は立村の肩に手を置き、大きく頷いた。ついでにもっかい名乗っておいた。たぶんこいつ、俺の名前覚えてねえだろう。
「俺は羽飛。はとばたかし。良く覚えておいてくれよな」

返事がなかった。戸惑っている様子だった。唇を振るわせるようにして何かを言おうとしているのはわかるんだが、視線をさまよわせておろおろするのはどうかと思うぞ。そうとうこいつ、人見知り激しそうだ。ようやくこくりと頷いた時、われらが担任、菱本守先生の声が遮った。
「さあ、入場行進だ。手と足を一緒に出したりするんじゃないぞ」
入場行進曲は、今年の選抜高校野球のと同じ曲だった。のりのりだ。思いっきり高校球児になった気分で俺は前に踏み出した。立村をはじめ他の連中もみな無言のまま、行進していた。

学校長、教育委員長、その他いろいろな関係の祝辞が続く。きっとあの人たちも生徒に祝辞を聞いてもらっていないことをわかっているだろな。棒読みだもん。「もっと俺の話を聞いてくれ！」っていうような、うちのクラス担任・菱本守ティーチャーのようなサービス精神に欠けてるぜ。俺は首筋がひりひりするシャツの衿をひっぱり、ネクタイを緩めた。一度結び目をやわらかくするとなんかもとにもどせない。しょうがないので思い切ってはずした。もう一度結び直そうとして結局単なる二重結びになってしまった。先っぽをいじりながら、俺は天井を見上げながら少し哲学した。
――立村みたいな奴、今まで会ったことねえな。
なんってんだろう。他の奴もそうだと思うけど、クラス替えなんかで知らない奴と喋ろうとする時、なんとなく「おっ、こいつは」って思う時がある。まだ一言も交わさないってのに、ちらと目が合っただけでちくちくいらいらする。
これがもし、女子相手だったら、「やべえ、また惚れちまったか、こいつに」だろう。
けど、立村に感じたのはそんな気色悪いもんじゃない。
たとえば野良猫の餌場で、いきなりイリオモテヤマネコを発見したような気分だった。
俺が話し掛けるまで、ほとんど……奈良岡を除く……の連中は立村に声をかけようとしなかった。俺もいつもだったら、「めずらしいやつもいるよな」と無視するだけだったろう。イリオモテヤマネコなんて、飼いたくもねえもんな。仮に立村が六年時の同級生だったら、即、浮いてたことは間違いない。
けど、なんか青大附中の校舎の中であいつの姿は、すとんとおさまっていた。
まかりまちがっても俺たちのいた小学校の中では無視対象だけど、あの教室、青大附中の学校内だから、どうしてもイリオモテヤマネコをなでなくちゃあ、そんな気持ちにさせられる。俺としゃべった時の口調だって、普通だったら「かっこつけるんじゃねえ、ばっかが」と張ったおすのが俺流だ。けど、なんかそういう気にはなれなかった。妙な話、他の奴とぜんぜん違う喋り方にもかかわらず、俺はこいつと話がしたくてならなかったんだ。
――こいつ、いっつもこんな喋り方してるのかなあ。信じられない奴だぜ。立村って、あの調子で小学時代すごしてきたんだろうか。めがね面の過保護お坊ちゃん・水口要もかなり変人だけどな、立村みたいななまっちろい奴がすげえ面白い奴に見えるのが、やっぱり変だ。

死ぬほど眠くなった以外、式には印象が何にも残らなかった。父母席の方ではなぜかいきなり泣き声が聞こえたが、それ以外はたいしたこともなく俺たちはそれぞれの教室へ戻った。少し間

があって、今度は父母連中がずらずらと教室の後ろ扉から入ってきた。もちろんうちの母ちゃんもいる。美里の母ちゃんもいる。殆どが女ってことだから、母親だろうな。男はふたりだけ。俺と美里の母ちゃんズは、きゃあきゃあ騒ぐこともなく、黙って菱本先生のお言葉を聞いていた。内容は俺たちにしゃべったこととほぼ変わらない、実に熱い内容だった。まあプリントの内容をそのまま、感情たっぷりに語っただけとも言える。さすがに「みなさまの大切なお子さまを」などと、敬語はまぶしてあった。やっぱ、大人だなあ。

　一通り終わった後、「起立、礼」の一声で立ち上がり、一礼した。俺はプリントをかばんにつっこみながら流れで頭を下げた。
　新皮の匂いは、なんとなく快感だった。癖になりそうだ。金具が硬くて開けずらかった。コツを覚えれば早いと姉ちゃんが言ってたけど、すげえ指が痛くなった。俺がかばんの金具と格闘している間に、美里は別の女子たち三人くらいとおしゃべりに興じていた。横目で見ると、さっきの奈良岡とあと、下ネタ突っ込みやってた髪の短い女子のふたりが混じっていた。俺にさっきピースしてきた女子だ。あっという間に友だち作るのは、美里の得意技だろう。あいつ、しゃべるからなあ。
　ようやく外れた金具にもらったばかりのプリントを押し込んだ。
　それにしても、髪の毛、なんであいつ切ったんだろう。
　あいつの見分け方ったら、後ろの髪をたらしたままの、前だけお下げ髪だったのにだ。
　六年間、意地で伸ばしてきたはずだ。短くしろって母ちゃんに怒られても、逃げ回っていたって言ってたぞ。いやあ、その気持ちわかる。すげえおっかねえ顔になってるもん。似合わねえ。なんで切ったんだよ。
　ま、確実なのは、廊下に出て娘、息子を待っている母ちゃんズが、お互いの子を誉めあってるってとこだろう。美里のうちとおんなじことを、俺がまたうちの母ちゃんにされるのはごめんだ。それにせっかくの入学式、まっすぐ親たちと帰って何が楽しいっていうんだ。いいか、入学式は親のためじゃない。入学した生徒のためにあるんだろ？　頼むから割り込むなって俺は切に訴えたい。
　がっちりロックし直したかばんの柄を握り、俺は後ろの立村に声をかけた。もうあっさりと片付け終わったようだ。他の連中がそれぞれの母ちゃんに取り巻かれている中、立村だけひとり静かに帰り支度をしている。
「立村、お前の父さん母さん、来てねえの」
「来ないって言ってたから来ないと思う」
　また目をそらして、机を見つめている。ちらと視線を上げ、俺を見てまた逸らす。どうしてもう少し目を見られないのか、俺には謎だがつっこむのはまた後でいい。
「俺のとこもなあ。一応いるんだけどな。邪魔じゃねえか。さっさと帰れって言いたいよな」
「一緒に帰るのか」
「全く、うるさいったらねえよ」
　うざったい親が付録でくっついてきてない立村が、この時はうらやましくてならなかった。

　俺が肩をすくめて「お手上げ」ポーズをしてみせると、立村は少しだけ口元をほころばせた。
「気持はわかる。俺の親が来ていたら、いったい何言われたか、わからない」
「たとえば」
「式の態度がなってないとか、服の着方がおかしいとか」
「そんなことでかよ、うっそだあ、くだらねえ」
「うちはそういう親なんだ」
　どうやら人間の目を見ることに尋常ならざる抵抗を持っているようだ。立村は言いながら時計に目を落とし、ほっとした風にため息をついた。腕時計はアナログ式だった。俺も釣られて、腕の時計を覗き込んでみた。制服を買った店で特典として付いて来た、ちびっこいデジタル時計だった。

「昼ご飯、どうしようかな」
「もうそんな時間かよ」
「あと五分で十二時だ」
　昼ご飯のことなど、俺の頭にはぜんぜんない。もちろん、家に帰ってから食うものに決まってる。けど「どうしようかな」ってことはこいつ、家で食べる気ないんだろうか。立村は自分のかばんをかちりと開けて、『青潟大学附属中学パンフレット』を取り出した。初対面から毎度おなじみのポーズ「文章に目を落としたまま周囲を無視」だ。後ろのページからめくって、『校舎説明』の地図をじいっと見つめている。やたらと首をひねっている。なんか言い足そうなんだが、言葉が見つからないと見た。俺の苗字でまよった菱本ティーチャーと同じだぜ。こっちから救いの手を差し伸べてやった。
「何探してる？」
　立村は視線をそのまま、地図に集中させたまま答えた。
「大学の学生食堂」
「そこで食ってくつもりかよ、ひえー」
「俺の家、遠いからさ。三百円以内の献立だったら、たぶん大丈夫だと思う」
　三百円以内ったって、かなり高いぞそれは。俺の小遣いをかなり侵食する額だと思うんだが、立村という奴、やっぱり俺には理解できん。しゃあないので奴の広げているパンフレットを覗き込んだ。校舎分布図の、『学生食堂』と書かれている部分を見つけ、指差してやった。
「なんだ、すぐ近くじゃねえか。立村、お前一人で行くのか」
「一人じゃなくてもいいけど」
　目をそらしたまま返事した。ってことは、俺もくっついてっていいってわけか。ふむふむ。
　それならお誘いをかけてみるか。俺流で。
「じゃあ俺が付き合ってやっか」
　かちっと音がしそうな視線で立村が見返した。一歩退きそうになった。けどあいつはすぐに元の顔に戻してこっくり頷いた。
「ふたりだったら、たぶん迷わないですむかな」

「俺も親と帰らなくてすむしなあ。うちの父ちゃん母ちゃんと食ったっておもしくねえもんな。じゃあいっかいっか」
　俺が気合入れて握りこぶしをこしらえ、「おーっ！」と天高く突き立てようとした時だった。

「貴史、帰るでしょ」
　余計な奴が割り込んできた。こういう時腐れ縁の幼馴染女子ってのはじゃまっけだ。いや別に、美里だったら一緒に食いに連れてってもいいんだが、あいつにはすでにもう、女子の仲良し連中がまとわりついてるだろう。美里だけならまだしも、そいつらといきなり仲良しこよしはしたくない。男は男同士の付き合いだってあるんだし。
「ああ、学生食堂、寄っていくんだ」
「いいなあ、私も行きたい」
「女子同士で行けばいいだろ。さっきしゃべってたじゃねえか」
「だって、あの子たちみんなお母さんたちと帰っちゃうんだもの。貴史と一緒だったら、うちの親と一緒に帰らなくても大丈夫だと思うもん、ね、一緒に行こうよ」
　ははあ、たぶん俺と美里の母ちゃんズ、青春時代に戻ってぴーちくぱーちくやりたいんだな。よっくわかる。美里もその辺は計算ずみとみた。まあ、美里が混じる分には俺はいいんだが、問題は連れだな。な、立村、どう出るか？
「まあね。いいでしょ、ね」
　美里は立村に初めて気付いたような顔して、ちらっと視線を向けた。
　はっきり言おう。美里、お前演技してるだろ。下手だぞ。
「あの、あれ、ええと」
。口篭もるのも最初のうちだけ、すぐにかわいこぶった声を作って立村に話し掛けてるじゃねえか。俺の鋭い眼をばかにしちゃあいけない。これはある種のサインだ。美里というよりも、立村の身の安全を考えて俺は観察を続けた。
「どこの小学校から来たの」
　人見知りしない美里にしては、珍しいことだった。いつもだったら俺の肩にいきなり腕をまわして、指差しながら、
「私、清坂美里！　こいつとは腐れ縁なの、よろしくね！」
　そのくらい自己アピールするに決まってる。こいつは男子女子関係なく、俺たちとの腐れ縁関係をぺらぺらしゃべる奴なんだ。なのに、なんでだろう。立村に対しての態度、妙に「女子女子」している。
　思った通り立村は思いっきり退いている。俺に「なんとかしてくれ」視線を送りながらも、必死に一言一言発している。哀れだな。たぶん美里のような爆弾女が混じってくるとは考えてなかったんだろう。ご愁傷様って奴だ。
「品山、の方だけど」
「そうなんだ、遠いんだ」
　また言葉が途切れた。美里も立村の口調に、一種の「イリオモテヤマネコ」っぽい天然記念物

の雰囲気を感じたに違いない。俺たち三人を巡って、残りの連中から視線がびしばし飛んでいる。俺のことを美里がしつこく「貴史、貴史」と呼び捨てにしてたのが、たぶん目だったからだろうな。まあいっさ。一週間も経ったらすぐに他の連中、慣れるだろ。
　青潟のエリート中学・青潟大学附属中学校一年Ｄ組の教室。
　美里はぜんぜん変わっちゃあいない。
　髪の毛はばっつり切っただけ。何にも、変わっていないんだ。

「あ、こいつさあ、俺と同じ小学校でさ、きよさか……」
「清潔の清いに坂道の坂。あの、確か、立村、くんでしょ」
　美里は俺の言葉を遮り苗字を説明した後、いきなり立村の苗字を呼んだ。
　よく覚えてたよな、こいつ。かなりびっくりだ。しかも目つきがかなりやばい。
　立村の目をじいっと見つめ、いかにも「目で殺す」って顔しやがった。その顔のまんま、むりやり笑顔を搾り出そうとしてるんだから笑える。殺されたかどうかわからんが、立村は答えている。えらいぞ、がんばれ。
「名前、なんで、すぐ覚えたの」
　苦しそうだ。美里から目をそらせながら、それでも口調は変えず、聞き返していた。
　美里はまた顔を変に引きつらせながら笑顔をこしらえ、大きく頷いた。
「だって、さっきから貴史とばっかり話していたでしょ。いやでも目立つよ」
　――本当のこと言ってしまえよ。美里。立村の名前が珍しかったからだろ。
　つっこんでやろうかと思った。けど出来なかった。もやもやじとじとするもんが、腹の中でうねっている。立村の言葉はとにかくゆっくりだ。
「羽飛……とは、結構仲良かったの」
「貴史とつるんで遊ぶのは面白いもん。腐れ縁って感じ」
「どのくらい」
「幼稚園前からだから、十年くらいかな、だよね、貴史」
　だから俺に振るなって。
　立村は、指で数えてみた後、俺をちらっと見て、美里から顔を逸らしてつぶやいた。
「長いよな、ここでもいっしょなんだ」
「なんだかよくわかんないけどね、けど立村くんってば、すっかり誤解してるでしょ。違うってば。またこれからみんなに、説明してあるかなくちゃいけないなんて、もううんざり。ねえ、貴史」
　息をつぐ様子がせわしない。
　あのな、美里。相手が何にも言ってないのに、勝手に想像して先回りするのはすっげえ失礼だと思うんだがどうだろうか。そのくせ俺に同意を求めるってのも、なんか違うんじゃねえか。要するに俺とお前とは、周りが誤解したがるようないちゃいちゃした仲じゃなくて、がっちり腕を組んでガッツポーズ組むような仲間だってこと、言えばいいんだろうが。

――美里って、立村みたいな奴が好みだったっけ。
　かつて美里が熱を上げていた野郎の顔は大体覚えていた。あいつなりにやっぱり「女子」っぽい恥じらいもあるみたいで、隠そうとはしている。だがやっぱりあいつに演技はむかねえ。俺の千里眼で一発、「誰にお熱」かがばれてしまう。しかもその相手ってのが、らしくもないというか、優等生っぽい感じの男子が多かった。まったく、美里が抱きついたら全身骨が折れてしまいそうな軟弱野郎ばっかりというのはどういうことなんだ？　当然、全く実る気配もなくみんな終わっていたはずだ。
　せっかく見えるものを、何にも言わずに終わらせるのもしゃくなので、
「お前、あいつのこと好きだろ」
　真実を突いてやる。
「何言ってるのよあんた、ばっかみたい！　ふざけないでよ！」
　その時は必死に否定する。まあいつものことだから俺は「ふーん」の一言で終わらせとく。
　その後一週間くらいしてから、ころあいよしとばかりにもっかい確認すると、
「なに言ってるの、私そういう趣味じゃない。あんな優等生のどこがいいってのよ」
　一週間前のパニックぶりとは大違い。冷静に答えが返ってくる。
　俺がが突っ込みを入れたとたん、熱が冷めるらしい。俺は冷蔵庫か。
　男子たちも美里のことを仲間だとは思っていても、「付き合い相手」としてチェックした奴は、全くいなかった。俺が断言する。絶対いない。もし告白してたとしても、すぐに振られてるだろうな。哀れな奴よ。誰にも、女だなんて、思われてなかったんだ。もちろん俺だって。
　お下げ髪を振り回して、はしゃぎ、笑い、泣き、叫んでいた美里。
　女子らしさというものがあったとすれば、前髪だけ編みこんだお下げ髪だけだ。
　よくひっぱって遊んだ。当然次の瞬間ぶん殴られたが、それはしょうがない。
　けどあいつの「女子っぽさ」をかもし出していたものが、今はない。ずっと野郎仲間っぽく「よっしゃー！」と気合を入れてしゃべったっていいはずだった。
　なのに、今、立村を相手にして、懸命にこっちを見てもらおうとしている美里の顔は、お下げ髪がなくても女子っぽさがぷんぷんにおっている。
　俺に話し掛ける時、あんな頬を赤らめてしゃべったりしたことなんて、一度もないぞ。
　さあ立村、こういうタイプの女子、好みなのか？

　とうとう立村は陥落した。美里のおしゃべりに押し倒されたんだな。
「それなら清坂さんも、一緒に」
　来るか？とまでは口にしなかったが、かなりぎりぎりのせりふを引き出した。何度か下を向いたり、ふらふら視線をさまよわせていたりしたけれど、いやでならなかったわけではなかったようだ。
「いいの？　ほんと？　ええ？　私女子なのに？」
　何勘違いしてるんだこいつ。ひとりではしゃぐな。うるせえぞ。反射的に美里の頭を軽くはたいてやった。恐るべし、仕返ししてこねえときた。猫かぶりもここまできたら本物だな。しょう

がない、言葉で責めてやる。
「お前が女子だなんてだあれも思ってねえよ、ばっかが」
　聞こえるか聞こえないかの声で俺はささやいた。しっかし聞いちゃあいない。
「私、母さんに言ってくる」
俺のことは見事に無視して、美里は机にぶつかりながら廊下へと駆け出していった。斜めになった机の位置、直せよな。
「かなり驚いていたなあ、立村。ああいう女子、品山になんていなかっただろ」
　俺はは疲れ気味の立村にねぎらいの言葉をかけた。
「あまり、女子と話したことなかったから」
「あいつを俺、女子だと思ってねえよ。一番、話が通じる奴なんだがな。何いかれちまってるんだか。まあ、あいつが男子だったらめんどくせくねえんだけどなあ」
「親友か？」
「ん、まあ、そんなとこ」
「一緒のクラスだというのは、いいよな」
　立村は窓の方を見たまま、ぽつっと呟いた。気が付いたんで、聞いた。
「品山から、お前の知り合い、誰も来てねえんだよな」
「いない」
　あっさりと答えた。立村はふっと息をつき、また顔をうつむけたままで、
「かえってすっきりするかな」
「すっきりかよ」
　なんか口の利き方がすげえ冷たく聞こえた。ひっかかる。

　美里が行きと同じ猛スピードで戻ってきた。教室には誰もいなくなっていた。声が響いた。
「許可が下りたよ！　さ、いっしょ学生食堂ね！」
「うちの親何て言ってたんだよ。」
「『美里ちゃんと一緒なら、ねえ』この一言で、片がついたわよ」
　ふんぞり返って俺ににっと笑った。なあに威張ってるんだこいつ。
「優等生の私に感謝しな！」
「どこが優等生なんだか、お前、今日、絶対、変」
「変とは何よ変とは！　ったく、貴史ひとりだったらすぐにおばさんが来て、無理やり連れてかれたわよ。私のおかげだってどうしてわかんないのよ、ばーか！」
　ふたたび立村の顔がひきつってきた。
　気付いたのは美里の方だった。いきなりかわいこぶった声に切り替えて、教室の扉を指差した。大人たちに見せつけるような、それこそ「優等生」の笑顔で立村に語りかけた。
「ね、行こうよ、早く！」

四

　青大附属は結構広い。中学、高校、大学の三点セットときたもんだ。
　どこも白い建物だらけで、パンフレットに載っている地図を見ながら、三人でうろうろしたものの、なかなかたどり着けなかった。
　『中学館』『高校館』『大学館』の三棟に分かれている。ペンキででっかく書いてあるからそれは読めるのだが。
「たしか、『大学館』の隣に学生食堂があるはずなんだ」
「中学にはなかったっけ？」
「あるけど小さい。大学の学生食堂の方が、広いらしい」
　立村がパンフレットを指差した。さすがさっきから繰り返し読んでいただけある。暗記してたなこいつ。、
「一緒に学生生協もあると聞いているけど、今日はまだ行けないな。俺たちの格好だといかにも、中学入学したばかりだとわかってしまうだろうし」
　知ったようなことを言い、立村はまた空をちらと眺めた。
「そんなに詳しいのに、なんでまだ俺たちたどり着けないんだ。ほら、見せてみろよ」
　実は十分くらいうろうろしているんだが、お目当ての学生食堂にはなかなかたどり着けなかった。立村がそこまでパンフレットを読み込んでいるのだからお任せしときゃそれでいいか、なんて思っていたが甘かった。どうやらこいつ、地図で正確な位置をつかむのが苦手らしい。すっかり途方に暮れている。俺たちも一緒に頭を抱えているわけにはいかない。こういう時こそ、俺の出番だ。
「とりあえず、あっちに言ってみよう！」
　促した。 嗅覚でなんとなく、わかるもんだ。
　教室に居たときと同じようにパンフレットを覗き込み、俺は立村の手から受け取った。「でもなあ、確かにわかりずらい地図だよ。おい、美里。もし見つからなかったらどうするんだよ」
　広げてみて現在位置を確認した。いきなり美里が「うるさいわね。くどくくらいなら探してよ。ほら見つけた！」なんだ、目の前に俺たちいるじゃねえか。俺は回れ右して、まん前の建物を指差した。戸口のガラスがぎらぎら光って、たまたま上の方に映っている文字「大学館・青潟生徒協会」の文字が読み取れなかっただけだ。
　いやいや、その文字が見えなかったのは他にも理由がある。
　入り口の柱には、ビラが汚く張り巡らされていたからだ。
「入学式後のおとうさん、おかあさん、お食事は生協で」
と看板がでているのが笑えた。いるんだろかと周りを見渡すと、結構親子連れで来ている奴らがいる。中学生同士というのは、どうやら俺たちだけみたいだ。
「あれ、なんだろ。変な文字」

　美里が向かい側の壁に立てかけてある、畳八畳くらいの白い看板を指差した。
　『原発反対！』『学長選挙に学生の投票権を認めよ！』と、赤い文字で、刷毛をそのまま縦線、横線引いた感じで書いてある。こんな文字で試験用紙に名前書いたら、一発でアウトだな。立村は少し立ち止まり、首を傾げるように眺め、
「たぶん、大学の思想系サークルの、立て看板だろう。学生運動関連。下火になっているとは聞いたことがあるけど」
　注釈を入れた。ここんとこだけ妙にはきはきしている。
　学生運動？　なんだそれ？　美里と顔を見合わせた。
「お前そんなこと、誰から聞いたんだよ。よっくわからねえ」
「うちの親が話してた」
美里も身を乗り出して割り込んだ。立村目当て、とだけ言っておこう。
「なあに、学生運動って」
　立村に並びかけた。自然とふたり、くっつくかっこうになる。
「俺もあまりわからないけど、大学内に『セクト』と言われるものがあるらしいんだ。たまに大学内で集会開いたり、デモ行進をしたりしているらしい。ヘルメットと手ぬぐいで顔を隠している人がそうなんだって、親から聞いたことがある」
「良く知ってるのね、すごい、どうして知ってるの」
　語尾を延ばさず、また美里は笑顔を立村に向けた。
「父さんがマスコミの仕事してるせいか、なんとなくそういう話、出るんだ」
「マスコミって、どんなの？　ラジオとか、テレビとかの？青潟有線放送とかの？」
「『週刊アントワネット』の記者やっている」
　かすかに聞こえるか聞こえないかの声で、立村は『週刊アントワネット』のところだけささやいた。俺もかなりびくんとした。なんてったって『週刊アントワネット』ってのは青潟発のちょっとやらしいことも書いてある週刊誌として有名なんだ。よくとこやに置いてある。残念ながら俺は手に取ったことがない。だって優ちゃん出てねえもんな。
　美里は密かにスケベ情報に詳しいのか、「週刊アントワネット」に思いっきり反応している。俺の顔を見ながら、意味ありげに頷きながら尋ねるのはやめろと言いたい。
「『週刊アントワネット』って、なんか、すごい雑誌だよね、貴史」
「なぜ、そういうことを俺に聞く。」
　これ幸いと話に加わった。俺も美里の隣に並んだ。三人くっついた格好になった。
「だって、貴史そういうの詳しそうだもん。芸能人ネタ詳しいよね、鈴蘭優命だもんねえ」
　そこんところは無視して、俺は立村に尋ねた。ちな
「立村、お前、自分の親が書いている記事とか、わかるのか、やっぱ、やらしいこととかも、あるんだろ？　そうだ、お前も読んだことあるのかあ？　教えろよ、なあ教えろよ」
「そんなの、わからない」
　少し機嫌悪げに立村は答えた。なんだか険悪なムードが漂いそうだった。けどな、立村、お前が「週刊アントワネット」とか「マスコミ」とか「学生運動」とか、そんなわけのわからんこ

と言ってかっこつけようとするから、ひっかかっちまうんじゃねえか。なんでいきなりガラスで跳ね返そうとするんだ？　そうだな、理科で使う短冊形のガラスあるよな、あれを身体にぴしぴし貼り付けているような感じがした。こっちで「おいおい、もっと話せよ」とつっこもうとするたび、ぴし、と跳ね返されそうになる。
　美里が急いで話の方向を変えようとしていた。こういう時、女子は頭がよく回るもんだ。
「ねえ、おなかすいた。早く入ろうよ」
「あそこでいいんだよな」
　まだむすっとしている立村の背中を押しながら、俺と美里は貴史は目指す学生食堂の建物へと走っていった。立村も少し頷くように頭をこくっと動かした。

　一皿五十円くらいからご飯もの、とんかつ、メンカツ、サラダ、煮付けなどが並んでいて、好きなだけ選べるようになっている。俺は小銭入れをポケットから引っ張り出し、百円玉三枚を握り締め、ざっと頭の中で計算した。どんぶり大盛り一杯、とんかつ、味噌汁、さらにじゃがいもサラダもくっつけて、四点セットでジャスト三百円。余裕だ。
　美里と立村もそれぞれ食いたいものをそれなりに選んでトレイの上に並べていった。やっぱり三百円以内を意識しているんだろうな。美里はメンチカツに珈琲ゼリーを、立村はサトイモの煮っ転がしと味噌汁、生卵を選んでいた。
　三人それぞれそろえたところで、俺が指揮を取った。
「ここでいいだろ」
「文句なし」
　一応ＯＫが出たところで、俺は四人掛けの小さいテーブルを押さえた。長いテーブルも空いていないわけではなかったんだが、私服姿の図体でかい大学生ばかりの中で食うのも気分いいもんでない。まずは席取り、かばんをテーブルの上に載せた。全員座った段階でどかし、さっそく俺は飯をかきこむことに専念した。横の席をひょいと見ると制服姿の親子連れが黙って味噌汁をすすっていた。会話は、ない。
　美里を中心に、貴史が左、立村が右。
「なんだか私ってお誕生日席にいるみたい」
「好きなんだろ。そういう風に女王さまっぽい顔してるのがなあ、美里」
「あんただって王子さまになりたいくせに」
「俺は鈴蘭優ちゃん以外の王子さまになんぞなりたかねえや」
　どんぶり飯はかなり大盛りだったはずだが、俺の腹には物足りない。これはもう一杯、もらってくるか。いざとなったら美里に借金しようか。箸を口につっこんだまま思案すると、美里がすげえ眼でにらみつけてきた。
「貴史、その食い方、なんとかしなよ。犬食いって奴だよそれ。立村くん見なよ」」
　目の前にいる立村の食い方を見ると、箸をうまく使い、静かにサトイモを口に運んでいる。。米粒を落とすことなく、小さい口でちょびちょびと。
「うるせえ。うまいものはうまそうに食うのが常識だろが。どこかの誰かと違ってお嬢さまぶり

っこして食うほど、俺は意識してねえもんな」
　さりげなく嫌味を混ぜてやったつもりなんだが、はたして美里は気付いただろうか。
「そんなに、おいしいか？」
　ぽつりと立村がつぶやいたのを、美里は聞き逃さなかったらしい。さっそく追求し始めた。全く俺の言葉は耳に入ってないらしい。

「あの、立村くん、味に結構うるさいほう？」
「そうでもないけど」
「和食と洋食、どちらが好き？」
「自分で作るんでなかったら、なんでもおいしいって思うけどさ」
　きょとんとした美里に、立村は戸惑った風にまたうつむいた。下向いて少しだけ笑った。
「うちは作ってくれる人がいないんだ。だから俺が自分で用意しないと食べるものがないんだ」
「だって、お母さんは、いるんでしょう」
　立村はあっさりと答えた。
「卒業式の後、出て行ったんだ」

　こいつのうち、母さんいないのか。
　なんだかとんでもないこと追求してるぞ、美里。
　おい、いいかげんにしとけよ。 話が暗くなるだろ。
　美里はちっとも退く気配ない。立村もそれがどうしたって顔している。そんなあせることでもないか。俺はやたらとかたいとんかつを噛み切りながら二人の様子を眺めていた。
「ふうん、そうなんだ。でも、親がいないといろいろ楽よね。いくらテレビ見ていても怒られないし」
「それはある」
　大きく頷いた立村。
「母さんがいなくなって最初にしたことは深夜放送を徹夜で見たことかな」
「ホラー映画とか」
「外国のテレビドラマの再放送もよく見てた。夜中のって、吹き替えがぜんぜんないから、面白いんだ」
　言っている意味が俺にはぴんとこない。俺からしたら深夜放送って、やたらと胸と尻のでかいお姉さんが水着姿でポーズ取っているところしかイメージわかない。当然、つっこんでやりたいところだ。美里、お前の気になる奴がどういう顔するか、よっく見とけ。
「やらしい番組も当然、チェックしたよなあ、立村」
　美里がすんごい眼でにらんだが、当然無視。立村の反応を待つと、
「も、あったから、観たよ。一応」
　全く同じ調子で返事してきた。なんだ、やっぱり同じじゃねえか俺と。ちっともやましいこと考えていないって顔しているのは、隠してるのかそれとも、本当に興味ないのか、どっちかだ

ろう。立村はふつう盛りの茶碗飯を、また一口箸で運ぶと、
「でも三日見つづけたら、そういう番組飽きたな。テレビ自体あまり興味なくなったしさ。今はほとんどラジオばっかり聞いているよ。天気のいい日、うまく電波を捕まえられると、洋楽専門のラジオ放送番組をエアチェックできるんだ。百二十分テープで三日分録音して、ヨーロッパチャート１００あたりを一日中流しっぱなしにして聴いてた」
　――なにその「エアチェック」ってのは？
「なあにその『ヨーロッパチャート１００』って？　青潟のラジオ局でそういう番組、なかったよね、貴史？　あんた、知ってた？」
　美里に聞かれちゃやばい話に持っていかれないように、立村が意識的にそらしていたらしい。俺がそれに気付いたのは、すべて皿の中のものが腹に全部おさまった後だった。

　美里のつっこみはかなり激しかったが、立村は顔色を替えずにさらりと流し終えた。
「水、どこかな」
「あそこだよ」
　立村は水を汲みに立った。一緒に美里もくっついていくかと思ったが意外、俺の隣にしっかりひっついてきた。なんか言いたいんだな。言えよ。
「立村くんって、なんだか良くわからないよね、ね？　今の話、聞いてた？」
「聞いてねえわけねえだろうが。目の前だっつうのに」
「それにさ、それにさ、ものすっごく、大人っぽくなあい？」
「お前よりはなあ」
　瞬時に俺の足元へ、強烈な蹴りが入った。いつもだったら手でやるんだろうが、目の前には立村がコップを持って席に戻ってくるのが見える。さすがに爆弾女子の美里も、初対面の奴に本性見られるのはいやらしい。俺は美里が食いかけている珈琲ゼリーを箸で無理やりどんぶりへ流し込んだ後、一気に口の中へ放り込んだ。ざまみろってんだ。
「私のゼリー、食べないでよ！　もう貴史ったら、ほんっとに下品もいいとこ！　あとでおばさんに言いつけてやるんだからね！　それやだったら、あとで私にアイスクリーム、おごりなさいよ」
「今度の小遣いが出るまで待ってろ」
　どうせその頃には美里も忘れているだろ。俺はぶんむくれた美里の腕を叩き、こっちを向かせた。
「なあ、美里、お前さあ、沢口が『あひるが催眠術かけられて、白鳥だと思い込んだ』って話、したこと覚えてるか」
「あったね、そんなこと。よく覚えてるねめずらしく」
「俺だって思い出したかねえけどさあ。なんかな」
　うまく言葉が出なかった。なんでいきなり俺もそんなこと言いたくなったのかよくわからん。やたらと濃い珈琲ゼリーの味が、舌に残っている。美里がすげえ早口で俺の耳にささやいた。
「私たちが白鳥のみずうみに来たおばかなあひるだって、沢口は言いたかったみたいよね。ああ

いうタイプの人ばっかしなんだから、白鳥に見えるように演技しなさいってことかな」
「別に演技しろとは言ってねえけどな」
　俺の語彙からなかなかぴったりくるものが見つからない。水を飲み干した。ほとんどなくなっていた。ああ、立村に頼んで二人分汲んでもらえばよかった。
「けどな、さっき立村にしてたお前の突っ込み」
「突っ込みってなによ」
「ほら、親がいるとかいないとか、あいつ聞かれたくねえことをさらりと流してただろ。大抵の奴ならさ、絶対言われた段階でぶん殴られるぞ」
「他の男子だったらね。私だってそのくらい、わかってるわよ」
「じゃあなぜ、立村の親についてあそこまで突っ込んだんだ？」
「ただ、知りたかっただけ。悪い？　立村くんはぜんぜん怒らなかった。それだけよ」
　あっさり美里は答えた。
「ただ美里。向こうにだってな、」
　立村がコップを持って戻ってくる前に、俺は強く、駄目押ししておいた。
「知られたくないことだってあるだろ。それ、考えろよ、ばーか」

　むっとした表情の美里は放置しておき、戻ってきた立村に俺はいくつか質問を投げかけることにした。こいつがほんとの白鳥なのか俺たちがあひるなのかよくわからんが、とりあえず立村という奴には興味大有りだったからだ。美里が何か俺に文句を言いたそうにしていたが当然無視だ。遮って浴びせ掛けた。
「立村、入試、何点くらい取った？　俺は算数と理科、すげえ簡単でほとんどパーフェクトだったんだけどな、国語がえれえ難しかったなあ。あんな漢字普通使わねえよな。『鳳凰』とかさ『潅仏会』とかな」
「反対だったな。国語はある程度点数稼いだけど、算数は……ほとんど白紙だった」
　んなわけないだろう。受かってるわけないじゃねえか。ふむふむとうなづくと、また美里が割り込もうとしやがった。
「私も国語得意よ！満点だもん」
「自己採点でだろ。当たってねえぞそんなのは」
「うるさいわね、あんただって数学と理科、満点取ったって自慢してたじゃない！」
　どっちがうるさいんだか。俺は美里を適当にあしらいながら、次の質問を考えた。
　そうだ、面接だ。青大附中入試では第一日目に学科試験が、二日目に面接が行われたんだった。一人十分程度で、「君の好きな食べ物はなんですか」「あなたの好きな動物はどんなもので、どうして好きなんですか」といった質問を投げかけられる。で、その十分間好きなことを受験生は喋る。とにかく言いたいことなんでも喋りつづける。美里と母ちゃんズの情報もあって、それなりに俺も対策を練ってはいたんだが、やってみたら見事にアドリブの嵐だった。そんな堅い雰囲気じゃなかったし、難しいことなんて全く聞かれなかったし。
　ちなみに受験生ひとりひとり、聞かれる内容は違っていたらしい。。美里の場合だと『好きな

洋服の好みと選び方』だったそうだ。きっと履歴書の「好きなこと、関心のあること」の欄に「おしゃれをすること」と書いたんだろな。俺も「すべての運動においてぶっちぎりの勝利を収めること」と堂々と黒いマジックペンで書いてやったから人のことは言えない。美里は思う存分、自分のおしゃれ哲学「フレアスカートとトレーナーのコーディネイトについて、自分なりのこだわり」を思う存分しゃべってきたんだそうだ。さて、立村、こいつはどんなことを聞かれたんだろう。
「好きな本はなんですか、感想を自分で説明してください。だった」
　――そんなの聞かれたらマンガしかねえだろが。
　よかった、俺はそんなネタじゃあなかった。もしそんなネタ振られたら今ごろ俺はここで飯食っちゃいねえ。美里も隙あらば、とばかりに俺の顔を覗き込み、
「そんなの、聞かれなかったよね、貴史」
　立村に向かい、ちらと視線を流す。見え透いてるなあ。俺は美里の色ぼけした眼を覚ましてやらねばと一案練った。
「どうせお前は洋服のことばっかりしゃべってたんだろ、耳にたこできるほど聞いたからもうしゃべるなよ」
「うるさいわね、貴史こそ何よ」
「俺は小学校の思い出についてしゃべれって言われたぜ」
「それは知ってるけど、あんた面接の内容ちっとも教えてくれなかったじゃない！　何話したのよ、修学旅行の枕投げやって徹夜で正座させられそうになったこと？　それとも運動会の徒競走で六年連続一位だったこと？」
　意外にも立村が笑みを浮かべて乗ってきた。
「俺も聞きたいな」
　ほほう、聞きたいか。それなら教えて進ぜよう。俺は背を伸ばし、人差し指をついと立て、ゆっくりと言い放った。
「四年生の時の、お泊り会脱走事件」
　美里の眼がいきなり釣りあがり、すげえ形相に変わった。
　口が半開きだ。両手をテーブルぶっこわしそうな勢いでたたきつけた。
　もう目の前に立村がいることなんて、見事に忘れているんじゃないだろか。
「貴史！あんた、まさかあの時のこと、しゃべったんじゃないでしょうね！」
　美里に絶対知られないようにしとかなくちゃまずいネタだった。
　だから今日まで、俺は口をつぐんできたんだった。
　まあいいさ、美里、いいかげん往生しろよ。立村の前でかわいこぶっても、なにやっても、結局お前は俺とのペアで六年間、戦ってきた仲なんだって認めたらどうなんだ？

「本当のことをしゃべって合格したんだ。問題ないんじゃねえの」
「じゃあ、あのこと学校の先生みんな知ってるってわけ？」
「みんなじゃねえよ。俺を面接した先生だけ」

「そんなのすぐばれるに決まってるじゃない！　貴史の非常識！」
「ばれたらまずいのかよ。俺はぜんぜん間違ったことしてねえのにな。お前だってそうだろが」
「それはそうだけど！」
　俺は平然と言い返した。
　立村はというと、コップを持ったまますうっと見上げていた。
　美里もさらに噛み付こうとしたらしいが、立村の視線に何か感じるものがあったらしくゆっくりと腰掛けた。
「いい、もう。ばれたらばれたで。でも、責任とってよ」
　むすっとした顔で小さな声でつぶやいた。
「責任ってなんだよ責任って！　まるであれじゃねえか、『お父さん、お宅のお嬢さんを』って奴か？」
　『嫁にください』、口に出そうになった。慌てて飲み込んだ。 思いっきり勘違いもいいとこだ。美里がさっさと言い返したおかげで、「嫁」なんて言葉は屁といっしょに腹の中に消えた。
「私たちがしたこと、当然のことだったんだって、ちゃんとここで説明してよね。私とか貴史と同じ立場だったら、誰だってそうしただろうってわかるようにね！」
　想像していた言葉とは全く違っていた。
　――お前を嫁にくれってか、責任取って。
　言わなくて、よかった。本当によかった。
　しゃれにならないことに、なるとこだった。

「あの、いいかな」
　立村が遠慮がちに、コップをテーブルに置いた。
「脱走って、どこからどこに脱走した？　学校から外に出たってだけか」
　ちらちらと美里の方に視線を送りながら、かすかな声でささやいてきた。
「うちの小学校一階に図書館があるんだ。体育館でみな、布団をしいて『お泊り会』をやったんだけどな。男女混合で。そん時いろいろあって、まあ、俺と美里が図書館に閉じ込められたんだ」
「誰に」
「担任に」
「信じられないことするよな」
　美里の顔、真っ赤になってやがる。かまわず俺は続けた。
「たいした理由じゃねえよ。クラスの男子と女子が四年生の時、妙に対立しててさ。体育館のマットレスを布団代わりにして、男子の場所、女子の場所って分けたんだ。黄色いビニールテープでまっすぐ仕切って『ここから先は女子、ここから中は男子』ってわかりやすくしたんだ。一歩でも入ったら半殺し、ってルールにしたってわけ」
「ずいぶん細かいことやってるんだな」
　不思議そうな顔で立村は答えた。

「そいでだ、夜になって全員寝る準備するだろ。たまたま、黄色いビニールテープを俺が踏みそうになっちまったのがきっかけでな、女子連中にすげえ責めらちまってさ。こええぞ女子。ビニールテープを挟んで、とにかくわめくわめく」
「わかるな、その雰囲気」
　その女子の中に美里はいないことを付け加えようと思ったがやめておいた。
　話が進めば違うってわかるだろう、。
「『男子って不潔！　ここから入らないでよ！』とかわめき出したんだよ。たまたまそん時担任がいなかったってのものもあって、バトル状態だったってわけだ。たしかそんな感じだったよな、美里」
　視界の隅で怒り狂わんばかりの形相でいる美里に、あとで足蹴りされるのは覚悟の上だ。
「立村、品山小ではそういうことなかったのかよ、お泊り会とかは」
「あったとしても無視していたと思う。あまり俺はクラスの行事に関知していなかったから」
「かんち？」
「関わらなかったってこと。その後、どうして図書館に閉じ込められることになったのかな」
　先を聞きたがる立村、せかせるでもなく、でも関心はあるって顔をしていた。俺が答える前に美里が割り込んだ。
「貴史が悪いのよ。だって、あの時いきなり私を名指しで呼びつけるんだから。私は面倒なことに関わりたくないから、ずっと無視してたのに」
「まともに話が通じるのって、お前しかいなかったんだから、しゃあないだろ。美里だったらあの意味不明な女子集団を黙らせられるだろうと思ったんだ」
　はあ、と美里はため息をついた。わざとらしいぞ。
「結局、貴史が騒ぎ起こしたそのとばっちりが私に回ってきたってわけよ。立村くん、たとえばけんかしている奴がいたとするじゃない。そうしたら中に入って『まあまあ』って言うよね。私がしようとしたのはそういうことなの。想像つくよね」
「そういうことを『仲裁』って言うんだぞ美里」
「うるさいわね、わかってるわよ。とにかく、貴史たち男子は、ビニール線の中に入ろうなんてしなかったって言い張るし、女子たちはそれぞれ、貴史たちが踏み込んだとこ見たって証言し、意見まっぷたつ。そうしたらね、貴史がね、私を呼んで『美里、お前見てただろ、俺たちなーんも、入ろうなんてしてなかったもんな』って言い張るんだから」
「清坂さんはその時、どうしていた？」
　立村は美里の方に身体を向けた。質問を続けていった。頭の中で話のつじつまを合わせたさそうな面していた。
「私？　例のビニール線の近くにしいたマットレスに座って、ぼーっとけんかしてるところ見てた。貴史と関わるとしゃれにならないことになるってわかっていたから。それに」
　美里はいきなり俺を真正面から見据えて言い放った。
「今だから言えるけど、貴史、あんたさ、思いっきりビニールテープから足、はみ出してたよ。私見てたんだから。あれ見てて、『俺は踏んじゃいねえよ』なんて、よく白々しく言えたよね、

心臓に毛、何千本生えてるのよ！」
「あ、はみ出てた、か？」
　とぼけてみた。俺も正直なこと言うと、その辺も確信犯だった。
「思いっきり！　言い合いになる前にさ、本当のこと認めて、女子たちに謝っておけばよかったのに！　あんたの尻拭いをなんで私がやらされなくちゃいけないのよ」
「俺の目では、ちょこっと踏んだだけだと」
「大うそつき！　あんた、思いっきり女子の陣地に入り込もうとしてたよね。何をしたかったわけ？　私だって気付いていたんだから、別の女子はばればれだったはずよ。嘘ついてまでなにやりたがってたのよ、ったく、もう」
　立村は美里がわめく様を、ものめずらしそうに眺めていた。ゆっくりと。
「喧嘩両成敗で、二人、図書館に閉じ込めたのか、担任が」
「その通り。話が早い」
　ビニールテープの境界問題説明は美里に取って代わられた。事実を捻じ曲げないことを祈りながら俺は立村と美里を交互に眺めた。一対一、なかなかいいムードだぜ。
「早い話、担任に私たち二人は思いっきり嫌われていたの。いっつも私たちが文句言ってたから、また首謀者はお前達だって決めつけたんだと思うんだ。ほんとはぜんぜん私関係してなかったのにね。たまたまちょっと手を出しちゃったせいで、『羽飛、清坂、現行犯だ、牢屋に入れ！』って怒鳴られて、ふたり襟首つかまれて図書館に投げ込まれたってわけ」
「図書館か。広いところに閉じ込められたのかな」
「広くないよ。畳三枚分の広さ。図書館を改造している時期でね、一時的に本棚を移動させたちっちゃな部屋だったの。ほんっと、めちゃくちゃ狭いの。うなぎの寝床ってあんな感じなのかなあ。南京錠かけられて、電気だけつけてもらって、『しばらく反省してろ』とか言うのよ！　最低でしょ！」
「とんでもない先生だな」
「戸を蹴りつけたり、体当たりしたりしていたよね、貴史」
「今の俺だったら壊すことできるけどなあ。やっぱり俺も四年生の時はさすがにできなかったよなあ」
「途方にくれていたんだけどね、よおく見たら窓だけ開けられるの！　引き戸だったから、中からぐいっと開くの。一階だからそんなに地面まで距離ないし、安心して猫の気持で飛び降りれば十分だったの」
　美里は俺に相槌を打てと言いたげにじろっとにらむ。上目遣いだ。
「窓が空いているのに気付いたのは俺だからな。それだけは忘れるなよ、恩知らず」
「うるさいわね。とにかく、その窓から脱走して、自転車でふたり、いろんなとこ真夜中の探検をして遊んだの。はたして本当に夜中のお寺の境内にお化けはいるのかとか、こういう時でないと、できないじゃない。一通りやりたいことやって、疲れきって鍵のかかった図書館にもどって、床に転がって寝ちゃった。気が付いたら、入り口の南京錠が開いていてびっくりしたよね。担任、あけてくれたみたい」

「あれな、絶対、沢口の奴、気付いていたよ。気付かないうちに私たちが脱走しちゃたから、惨めで何にも言いたくなかったんだろうね」
　立村は黙ったまま聞いていた。ゆっくり表情がほどけていった。
　美里の言葉に酔っちまったようだ。
「夜中、外に抜け出して過去の人と出会うって本を読んだことあるんだ。いつかそういうことできればいいなとは思っていたけどさ、本当に出来たんだな、うらやましい」
「今だってやろうと思ったらできるよ。今度やるときは、立村くん、絶対誘ってあげるね」
「おい、美里、しゃれにならない発言気をつけろっての」
　俺の親らしい態度も無視しやがった。美里はすっかり舞い上がっちまった。立村に向かい、テンション高く言い放った。
「青大附中では宿泊研修とか、合宿とかたくさん行事あるんだよね。だから、機会を見てまた脱走やりたいよね。一緒に計画立ててやろうよ、ね、立村くん！」
　立村を巻き込む形でさらに広がっていく。まことにもって恐ろしい女子だ。美里って奴は。

　もっと立村から根掘り葉掘り聞かれるのではと思っていた。俺もあたりさわりのない答えを用意し、それなりに取りつくろうつもりでいた。ずいぶんわくわくしながら立村も美里の話に耳を傾けている。ただ美里もやっぱし初対面の男子相手に、具体的になにやらかしたかまでは説明しようとしなかった。立村が聞かなかったってのもあったしな。
　なんやかやしゃべくっているうちに、立村は手首を少し上げるようなしぐさをして、
「そろそろ、帰らないとまずいな」
　腕時計に目を走らせた。なんか俺たちに「わかってくれよ」って言いたげな顔をして見せた。俺も釣られて時計を覗きこんだ。「１４：１０」と蛍光緑が訴えている。
　美里が口を尖らせた。
「まだ二時過ぎたばかりよ。何か用事あるの？」
「夜の六時くらいから親戚の人がうちに来る予定なんだ。早く戻れって言われている」
「入学祝い持ってきてくれるんでしょ。いいなあ、お金持ち」
「そんなわけじゃないよ」
　俺も美里もせっかくもらった入学祝を、全部母ちゃんズに吸い取られるってことを俺は知っている。それで美里は、せっかく新しい洋服を買ってもらうつもりだったのがはずされて、すねてるってことも知ってるぞ。
　ごねるのはあきらめたらしい。美里はまた笑顔をくりっとこしらえた。
「どうせ明日も、授業、早く終わるよね。また明日、立村くんの話、聞かせてよ」
　立村が息を呑んだ。俺もびっくりだ。
「美里、おまえさ、女子との付き合い、あるだろが」
「なに言ってるの。女子が男子としゃべっちゃいけないわけ？」
「悪いとは言わねえけどさ」
　――なんでおまえ立村にくっつきたがるんだよ。

　胸につっかえるもんがある。情けねえ。美里はもう言いたい放題だ。勝手にしろ。
「せっかく同じクラスなんだから男女関係なく仲良く遊びたいもんね。貴史だってそうじゃないの？　私、立村くんみたいな人、小学校であまりしゃべったことないもん。もっとしゃべろうよね、ね？」
　いつもだったら俺も頷いて、「まあそうだな、俺もお前みたいな奴、見たことねえし、美里の言う通りかもなあ。ま、よろしくな」くらい言って、肩を組んで記念撮影くらいするだろう。けど、どうもそういう風に身体が動かない。春休み中で身体がなまったのか？
「とにかく、さっさと行くぜ、ほら、早くしろよ」
　美里の目を見ず、俺は立村に眼で合図した。一年Ｄ組の教室内で、哀れにもこれから美里にひっつかれる運命となった立村に、ひそかに合掌した。

　方向音痴が判明した立村を無視し、俺が先導して無事、自転車置き場に到着した。
　立村はかばんをさくっと開けて、すぐに鍵らしきものを取り出した。
「今日は、ありがとう」
　礼儀正しく、俺と美里に笑顔を見せた。初対面の時とは違い、だいぶ普通の人間らしい面になってきている。少し美里の方へ身体を斜めにし、
「脱走の続き、今度、もっと教えてほしいな」
　相当、気に入ったらしい。変な奴だ。
「うん、いいよ。こんな話でよかったら、もう山ほどあるもんね！」
　美里の答えを聞いてるかどうかわからんが、立村はすぐに目をそらした。次は俺に身体を向けた。俺の自慢の愛車をじいっと見つめた。
「スピード、結構出るだろ」
「そりゃあ、使い込んでるもんな。一度、スピード勝負してみるか」
「やってみたいな」
　さらりと言葉を返した後、もう一度立村は頭を軽く下げた。自分の自転車を押し込んでいる方へ向かい、
「また明日、よろしく」
　小さい声で挨拶した後、背を向けた。けっ、どうせだったら校門まで一緒に行こうと言えばいいのにだ。ものすごい勢いで自転車をひっぱりだし、またがったと思うや否や校門目指して全速力で突っ走っていきやがった。

「相当、急いでるんだね」
「品山ったら、遠いもんなあ」
　俺と美里はふたり、自転車を引っ張り出すのも忘れて、ぼけっと見送っていた。

六

六

「おまえ、おじさんの車で来たんだろ。それなら自転車の後ろに乗せてってやろうか」
「もちろん、よろしく」
ま、これはいつものパターンだ。どうせ明日から美里も自転車使うことになるだろう。
俺か美里か、どちらかが自転車に乗ってこれなかった場合、大抵二人乗りの話と相成る
「でもね、ちょっと学校から離れたとこから乗せてもらった方がいいかも」
「なんでだよ」
周りを見渡して他に聞いてる奴がいないのを確認し、美里はゆっくり言った。
「たぶん、二人乗り禁止されてる恐れ、あるよ。今からしくじりたくないよね」
「まあな。入学式後いきなり停学は食らいたくねえもんな」
美里の歩く速度に合わせて、俺は自転車を押した。使い込んだ俺の愛車は、かなりギアがきいていて、本気で走ったら相当なスピードが出るものだった。

「あのさ、貴史。なんであの時、女子の陣地に割り込もうとしたのよ」
母ちゃんズのうるささについて悪口三昧わめき散らした後、美里がいきなり話をひっぱりもどしやがった。とぼける。今更古い話、持ち出されたかねえや。
「あの時、っていつだよ」
「さっき話したでしょ！　四年のこと！」
「そんなの知らねえよ。ま、俺は今日現在まで絶対あの場所ではみ出してなかったと信じるけどな」
「うそつき！　あんたが他の女子とけんかし始めた時、まずいなあと思ったんだから。勝ち目ないもん」
「うそじゃねえよ」
「じゃあさ、なぜ？　なんであの時、『美里だったら、そばで見てたから、証言できるだろ』って変なこと言い出したわけ？　。そこで私が『線はみだしてたよ』って言ってたら、あんた、地獄のどつぼに突き落とされてたって！」
「女子と話してても埒があかねえから、しゃあねえってことで美里を呼んだんだろうが。昔のことだからそれ以上はすっからかんに忘れたぜ」
「忘れたとか言いながら、あんた面接の時にしゃべってるくせに。貴史ってへんなところでおしゃべりだよね」
「美里に言われたかあねえよな」
美里の追求を交わしたくて、俺はすばやく何もくくっていない荷物台を指差した。美里の指定席はここだ。
「この辺でもう大丈夫だろ、乗っちまえ、早く」

　不満そうにほおをふくらませながら、美里はちょこんと女子っぽく横座りした。へえ、珍しくまたがないんだな。
　言えなかった言葉ばかりがふくらんで、喉元を押し付ける。ひりひりした感覚がある。踏み心地のちょうどいいペダルを、押さえつけるように踏み続けた。

　美里に嘘ついたことはない。
　ただ、言わなかったことはたくさんあった。

　小学校四年くらいの時だったと思う。俺も美里とふつうにしゃべってふつうに遊んでふつうに互いのうちに泊まってってことを繰り返していた。別に悪いことしているわけじゃないし、今思えばなんであんなに騒がれたのかわからない。俺はどうだってよかったんだが、美里の方が一気に爆発してしまった。それなりにあいつが女子連中から、
「清坂さんって、男子とばっかり遊んで、やらしいよね」
　どこがやらしいのか俺にはちっとも理解できないんだが。
　理屈で片付ければいいじゃねえかと、俺は思うんだが、当時の美里にそれはできなかったようだ。確か四年の春くらいに俺が普通に声かけた時、
「もう、貴史とは遊ばないから！」
　いきなり宣言しやがった。ついでにおまけで周りの連中に聞こえよがしに、
「私と貴史とは好きあってなんかいないからね！　いつも私とあんたとがいちゃいちゃしてるとか、ひゅうひゅうとか言われるのもういやだから！」
　そこまで言われたら俺も、「あっそ」と引くしかない。こっちだって面倒なことにかかわりたかねえもんな。お互いそんなわけで、夏休みのお泊り会まで一言も口を利かずに過ごしたわけだった。別にしゃべらなければしゃべらなくてもいいと思っていたし、無視するなら無視すればと思っていた。
　やきもきしていたのは母ちゃんズのおふたりのみ。
「みさっちゃん、うちの貴史とけんかしているみたいね。やはり、女の子なのかしら」
　そううちの母ちゃんが、美里んとこのおばさんに電話していたのを聞いたことがある。
　女の子だったら俺にけんか吹っかけたがるのか？　よくわからねえ。

　そのお泊り会で、やはり男女あんまし仲良くないクラスだったこともあり、俺たちは見事なほど無視しつづけていた。ビニールテープで境界線をこしらえる前からそうだった。もっともその事件を引き起こす前、美里が寝床用にしいてあったマットレスの上でリリアンを編んでいたのを見た記憶はある。ちんまりと座っていた。俺の当時知っていたあいつとは違い、ずいぶんしおらしく女子っぽい遊びをしていた。もちろん無視だった。
　さて事件が起こり、目ざとい女子捕まってあーだこーだ責められた時も、
「あんたが踏んだんでしょ！女子のところに入ってこないでやね」
「俺は踏んででなんかねえよ」

　美里はふいっと無視し、リリアン編みに集中していた。こうも露骨に背中向けるのはどうかと俺も思い、確かな目撃者として証人に立たせるしかねえと判断したわけだ。
「美里、お前見てただろ。証言しろよ」

　はっと美里が身体をびくつかせ振り向いた。手からリリアン滑らせていた。
「なんで私が見てなくちゃいけないのよ！　私に関係ないじゃない！」
「俺だってお前なんかに頼りたくなんてねえよ。でもしょうがないだろ、観ていたのはお前だけなんだから」
「いいかげんにしてよ！」
「見てないわけないだろがあ！　いいかげん無視するんじゃねえよな！」
　美里の言い返す言葉は変だった。とっくに「ビニールテープの境界線を踏んだか否か」の問題を飛び越していた。無理やり話を別の方に逸らそうとしている。しかもだ。
「私だって忙しいのよ、『羽飛』にかかわらなくちゃ行けないのよ！」
なにかが化学反応を起こした。美里が俺のことを、簡単に読めねえような苗字で呼ぶことなんて、生まれてから一度もなかったはずだった。

　黄色いビニールテープなんて無視して美里に近づき、お下げ髪にしていたふさを思いっきりひっぱった。
　反動で美里も何かが切れたように俺の足にしがみつくように倒れた。その足を払ってころばせようとした。決まらない、美里は尻もちをついただけですぐに立ち上がった。手元にあったタオルを美里は俺に投げつけた。たかがしれてる。俺としてはその倍返しをせざるを得ないってことで、用具準備室から空気の抜けたバレーボールを選び、一発命中させてやった。。
体育館いっぱいを使用した派手な一戦だった。すでにビニールテープの境界線ははがれていて意味のないものになっちまってた。
　クラスメイト一同の激しい応援合戦の中、俺と美里の肉弾バトルは続いた。

　三ヶ月間俺も美里も気持ち悪いくらいおとなしくしていた。今思えばあの沢口の奴もおかしいと思っていたんだろうな。いきなり俺と美里を一発ずつ平手ではたくと、理由も聞かねえで言い放った。
「羽飛、清坂、そこまでだ、お前らふたりとも、牢屋に行け！」
　俺と美里はいっつもセットで数えられていた。どっちが悪いかははっきり言っちまうと、俺の方だろうな。けどそういうところが男女平等な沢口は、俺たちの襟首をそれぞれ片方ずつでつかみ、図書館準備室へ引きずっていった。狭い部屋だったのは、俺たちが立村に話した通りだった。

　俺たちはつったったまま、沢口の足音が消えるのを待っていた。
　お互い罵り合ってたわけだ。もう一発二発やりあってもいいような気もしたんだが、なんだか

気が抜けてサイダーしゅわしゅわな燃えるもんがなくなっていた。これを「頭が冷える」っていうんだろうな。
　顔を見合わせ、美里が電灯をつけた。
　汗で顔がべとべとしているのを、俺は腕でぬぐった。美里が振り返り、ぎらぎらした顔のまんま俺を見た。
「冗談じゃないわよ！」
　またかよ、せっかく俺が頭冷やしてるってのに、美里の奴まだわめきたりねえのかよ。
　俺が言い返そうとしたら、一気に美里はまくし立てた。
「沢口の奴、何を考えているのかわかんない。最低！ここから出なくっちゃ！」
　俺相手じゃあないってことだ。ふつうの会話でＯＫだ。俺は戸を指差した。
「奴はいなくなったみたいだけどな。美里、戸、開けられるか」
「南京錠がかかってるんだもん。本気で壊さなくちゃ出られないわよ」
　とにかく監禁されたってことだけは確かだ。美里はしばらく黙っていたが、大きくため息をついたあと、
「いったん休戦ね。図書館に一晩中いるっていうのは絶対いやよ」
　あっさりと休戦の話を持ち出した。クールな頭の俺も、それに異存はなかった。
「同じく。食い物もぜんぶ向こうに置いてきたんだ。腹空くぜ」
「とにかく、どうするか、だわ」
　ガラスを割っちまうとたぶん弁償になる。親が出てきてまたややこしいことになっちまうだろう。だから戸だけをはずす方法を俺たちは考えた。まずは軽く押したり、引いたり、蹴飛ばしたりいろいろなことをしてみた。だが腐っても南京錠、頑丈だ。びくともしねえ。

「貴史、見なよ。ここの戸、空いてる。どうする、出られるよ」
　美里が窓の外を眺め鍵を開け、俺の名前を呼んだ。
「誰かいるか？」
「いないよ。いるわけないじゃない。外、出るでしょ」
「出てどうする、体育館に戻るのかよ」
「戻るわけないじゃない。貴史、あんた自転車どこに置いてる？」
　昼間、学校に集まった際、大抵の連中は自転車をどこかの公園か校庭裏に隠しておいていた。一応、学校では自転車通学が禁止となっていたからだった。
「寺の松の木の下」
　学校の裏に小さな寺があり俺たちたちはよく遊び場にしていたもんだった。境内で鬼ごっこしたり、夏休み中のラジオ体操もそこだった。すみっこにでっかい松の木が生えていて、まつぼっくりが雨みたいに降り注いでくる場所があった。寺専用の駐車場らしい。けど、俺たちにはその辺どうだってよかった。臨時で自転車置ければそれでいい。今のところどやされたりはしていない。。
「公園だとさ、他の奴がみんな置いてるだろ。知らねえ奴に盗まれるのもいやだったしさ」

「そこに置いてあったの、あんただけ？」
「俺だけだ。とりあえず、一台だけしかなかった」
「そうか」
　美里は外に身を乗り出し、しばらくそのままでいた。振り向いた。
「どうせだったら、夜遊びしよっか」
「夜遊び？」
　美里は俺を手で招いた。俺の顔見て、いきなりにっこり笑いやがった。
「沢口を、見返してやろうよ」

　夜遊びと見返すことと、どう繋がるんだ、そうつっこむ間もなく美里はマシンガン口調でしゃべりだした。
「だってさ、ふつう、言い訳させてくれるよね！　他の先生だったら絶対、そうだよ。でも、沢口はいきなり、『牢屋だ！』とか言うんだよ。なんかおかしいよね。変だよね」
「ぶんなぐってやりたいとは思うな」
「でしょでしょでしょ！　いっつもそうだよね。遠足の時だって、社会科見学の時だって、いつだってそうだよ。いつも私とあんたばっかり責められてさ」
「俺たちのことをああまで嫌うんだろうなあ、恨みでもあんのかよ」
「わかんない、でも、すっごく腹立つよね」
　近づき、俺も窓の外を眺めた。そろそろ鈴虫の声が聞こえる八月半ばだった。夜、親に「布団はがないで寝なさい！　風邪ひくよ！」とか言われて怒られる時期が近づいていた。
「沢口はみんなで楽しくお泊り会できたと思ってよろこんでるよね。私たちがいなくなったからってさ」
「いつものことだろ」
「だったら、私も楽しいことしたい。しようよ。いいよね、沢口がいないんだから、好き勝手なこと、できるよ」
「たとえば、何だ？」
　俺に美里の鼓動らしきものが伝わってきた。心臓の音に近い、とくとくという、かすかな響きだった。離れているのだから聞こえるはずはない。けど、自分の心臓の音と一緒に、二重に響いていた。
「私、自転車、うちに置いてきてるんだ。取りに行ってくる」
　ぎらついたまなざしで美里はじっと俺を貫いた。
「夜の駅前とか、見に行こうよ」
　つられて俺も頷いていた
「美里、お前俺の後ろに乗れよ、だったら一台ですむだろ」

　戸を開けっ放し、図書館の電気もつけっぱなし。さっそく俺たちは窓から飛び降りた。それほど高さもないし、俺も美里も身体がかるかったせいか着地もうまくいった。

けど俺たちのやろうとしていることは、今思えばもろ、「非行」そのもんだろう。
もう夜十時近いってのに、男子と女子仲良く自転車に乗り込んでだ、ふらふらと町を走っているんだぞ。俺ももちろん、ちらと補導される可能性を感じなかったといえば、嘘になる。学校の近くはそれこそ口うるさいおっさんおばさんが多いから、すぐに連絡されるかもしれないわけだ。そういうのに慣れてないとは言わねえけど、やはり少々どきんとするものがある。
けど、あの時に限って言えば、誰にも会わなかった。
美里と一緒に俺の中のなんかが動いた。
にっくき沢口、けんか売っていた女子連中、あぜんとして見送ってた男子連中、そんな奴らがどっかに吸い込まれたような感じだった。あの夜は今思えば奇跡だった。とことん、なんかに守られていたような気がする。

どのくらい美里を乗せて自転車を漕いでたんだろう。喉の奥ひりひりした。息ががさがさしている証拠だ。喉の感覚で、思いっきり遠くに来ているんだってことがわかった。
夏の夜道を、全く人に会うことなく走りぬけていた。よくうちの母ちゃんズには「神隠しに会うから、夜ふらふらと出かけるんでないよ！」口すっぱく言われていた夜道も、月明かりと街灯の中をスピード上げて走ればすうっと気持ちいいだけのものだった。目の前に下り坂を見つけた。闇だったんでどこだったかは忘れた。美里に悲鳴あげさせてみるのも面白いかもしれない。けど後ろでつかまっている美里は悲鳴ひとつあげやしなかった。もわっとした空気とひんやりした風が入り混じる中、美里は笑いながら、
「最高！　もっとスピード出して！　貴史、やるう！」
叫び声を上げていた。ほんと、よく見つからなかったもんだ。
そろそろ俺も休憩したくなって、ペダルを漕ぎつつみ渡した。さすがにまったくわからない場所というわけではない。いつもバトミントンをやっているコンクリートの敷地を発見した。いつもだったらそこらへんでおっちゃんこするのも手なんだが、なんか昼とは違って体が硬直してしまいそうな気がしてためらった。
「これからどうする？　美里、戻るか？」
「どこにいくのよ、いくとこないじゃないの」
学校なんかに戻りたくないってことが、よっく分かった。
何も怖くなかった。どこへ行ったってかまわない。さらさらと叢のすれる音も、ばらばらした星も、どこかぼやっとくすんでいた。スピードを上げ続けないと、なんかに逃げられてしまいそうだった。

自転車を寺の松根元に留め、俺はサドルにもたれて空を見上げた。
寺の自転車置き場からは、学校図書館の灯がちゃんとついているのが見えた。
俺たちがつけっぱなしにしたのと同じ状態だった。窓も開いていた。

「いないって気付かれたかなあ」

　美里は自転車のそばにしゃがみこみ、ひざを抱えた。唇をとんがらせていた。
「電気が消えてないところ見ると、まだ気づいていないかもね」
「だろな。今のうちに帰れば ばれねえですむってとこだ」
　俺たちふたりが忽然と姿をけしていたとしたら、沢口をはじめ関係者の大人連中は大騒ぎだろう。もしかしたら俺と美里の両親ズ四人、沢口に土下座してるかもしれねえ。けど、俺が見る限り、図書館の窓に映る光に変なものはなかった。
「もう少し遊んでようよ」
「なんでだよ」
「おもしろくなくなるから」
「どこがおもしろくねえんだよ」
　美里は答えなかった。そっぽむいてやがる。
「どうせ俺としゃべるのやだったんだろ」
「そんなこと、言ってないじゃない」
「さっさと帰れよ。俺、今のこと誰にも言わねえから」
「そんなんじゃないもん」
　俺の目をじっと見上げ言い切った。見上げた瞳は鋭かった。
「じゃあ何がいやなんだ」
「沢口とか、うちのクラスの勘違い連中に決まってるじゃない。ふつうに人が話してるのに、どうして、そんなにひゅうひゅう言われなくちゃいけないの！」
「ばか、そんなことかよ」
「私、普通に話しているだけだよ！」
「言いたい奴に言わせとけばいいだろ、関係ねえもん」
「男子は楽だよね」
「楽じゃねえよ。俺だって言われてるんだぞ、知らねえくせになに考えてるんだ、ばーか」
「好きとか嫌いとかひゅうひゅうとか？」
　俺は頷き、松の木によっかかった。こうしてると、木の幹からしゅうしゅう音が聞こえて面白い。
「しょうがねえだろ、美里としゃべってるほうがおもしろいんだからな」
　美里はしばらく、考え込むように地べたを見つめていた。
「一言言えばな大抵の話、済むだろ。すげえ、楽だ」
「そうだよね、それだけだよね。楽だからよね」
そんなこともわかんないなんて、沢口もあいつらも、ばかみたい」
　深呼吸したあと、美里はいったんしゃがみこみ、
「せーのっ！」
　掛け声かけ、枝に向かってジャンプした。
「貴史、もどろっか。沢口への仕返しを考えようよ、作戦会議よ！」

　後に知ったことなんだが、俺たちふたり、夜っぴいて「打倒沢口・作戦会議」を開いていた頃、沢口はひとりで近所を探し回っていたらしい。どうやら入れ違いか何かで俺たちの姿が行方不明になっちまったってことで、責任感じてたんだろう。両親ズを呼び出すこともしなかったし、もちろん学校のお偉方にも報告しなかったらしい。もっとびっくりしたのは、当時体育館で寝泊りしていたはずのクラスメート連中が何にも知らないまま卒業しちまったってことだった。俺と美里、あとは沢口しかこの脱出事件の真相を知らないというわけだった。今思えば、男子と女子を二人、いくらなんでも閉じ込めて南京錠をかけておくなんてのはあとでＰＴＡあたりから突き上げ食うかもしれないやりかただろう。
　ま、運が良かったってことだ。結局俺たちの脱走騒ぎはすべて闇に葬られた。
　そして三年間の封印切ったのが青大附中の面接入試会場ってのが、まあ、俺なりの報復ってとこだ。沢口、ざまーみろ！

確かあの夜通った道だった。美里を後ろに乗せて走り回った道だった。
今と違うのは、道路沿いに桜がちょこっと咲いていることぐらいだろう。
まだ散ってはいなかった。
「今日は青大附中だけが入学式だよね、公立は明日だって言ってたよ」
「だから誰もこの辺歩いてねえんだな」
「どうしようね、こんなかっこで二人乗りしてるって、告げ口されたら、どうする貴史？」
「知らねえよ。『清坂と羽飛は付き合い出してる』とかまたいつものパターンじゃねえの」
「あ、いつものことね」
　美里はさらっと流した。ちっとも反応しやしねかった。
「でも、そんなのどうでもいいじゃない。楽しいからしゃべってる、楽だからいっしょにいる、それだけのことなんだもん」
　かつて、俺は同じことをを美里に言ったことがあった。夏のあの夜だった。
　とシュチュエーションはまったく変わっていない。三年も経ってないってのに、美里の喋り方は全く変わっていた。思わずふらついた。
「ばか、何ひとりでゆらめいてるのよ、落っこちたらどうするのよ！」
「ちびのくせに体重重たいくせに」
「残念でした。私、五年生から体重変わってません」
　そこまで言って、突然美里は何かに気付いたように、はっとあたりを見まわした。
「ねえねえ、貴史。私、太ったように見えた？」
「思ったより、ちびだとは思ったけどな。入場前に整列しただろ。お前、はるかかなた前に行っちまってるんだもんな」
「背が低いと、やっぱりそう見えちゃうかあ、太ってるって」
「俺にか？　は、いまさら」
「ばか、あんたはどうでもいいよ。それよか」
「ははあ、もしかしてお前、あいつにそう思われたと、思ってるんだろ。ばっかみてえ」

　俺はもう一度ハンドルを握り直し、態勢を整えてペダルを漕ぎ始めた。
　美里が何か言い返すのを無視した。さっさと家まで運んでいきたかった。
「美里、お前、さっきのあいつに惚れただろ」
「ばっかみたい。あんたねえ、入学式そうそう、なに考えてるのよ、私だってそんな暇人じゃないわよ」
「甲高い声出して、色気づいてたくせに」
「そんなんじゃないわよ！　もう、やらしい！　ただね、あんまりしゃべんない人なんだなって思っただけ」
「ねこかぶってるんじゃねえの最初だろ」
「なんだか私たちとは違う世界の人って感じしなかった？　お父さんが雑誌記者で、お母さんがいなくて、大人っぽくて」
「今まで会ったタイプの奴にはいなかった奴だよな」
「でしょ。これから私もあんたも、ああいう感じの人たちと付き合っていくんだよね」
　もう一度、自転車を止めた。俺もゆっくりと振り返った。美里は座ったまま、俺をちらりと見た後、
「貴史、あんたとは違うよね、なにもかもが」
　その後、軽くうつむいた。

　美里がどうして、合格発表の時、俺に抱きついてきたのか。
　ずっと俺の中にひっかかっていた。何かがとけた。つながった。
　ひとりで白鳥のみずうみに飛び込むのが、怖かったんだ。

　俺が母ちゃんズの手の込んだ説得に根負けしたふりして、
「しゃあねえな、受けるだけ受けるけど落ちても受験料もったいねえとかいうなよ！」
　そう言い放った次の日、どこから聞きつけてきたんだかあいつは、
「使い終わった問題集あるから、あげるよ、どうせあんたぜんぜんやってないんでしょ。ばっかみたいよね」
　俺にわざわざ持ってきやがった。嘘つけって思った。だってその問題集、新品だったぞ。どっかの本屋で買ってきたものだなってすぐわかった。けどなんも言わないでおいた。
　その後もあいつは塾でもらったとかいうプリントを、わざわざ俺の部屋まで来てコピーしたもんを届けてきた。頼みもしねえのに、答えと自慢話をひとくさりしやがった。
「塾で出た模擬試験だけどさ、貴史、ぜんぜん受けてないよね。あんた解ける？　私国語、満点だったんだから。すごいでしょ、ほめてよね」
　意地でも褒めなかった。自己採点の結果、国語は美里に大きく水をあけられたが、算数と理科は九十点以上稼いだ。たぶん総合点では俺の方が上だった。ざまーみろってこっちが自慢してやったら、美里はすっかりぶんむくれていたっけか。
　ライバルが増えたんだからもうちっとあせるだろうに、美里の奴、ひたすら俺の家に通いつ

めて、母ちゃんにねこかぶりの笑顔見せて、
「ね、塾の情報教えてやるから、ほら、あんたの部屋に行こ」
「お前なんで、学校でそういうこと話さねえんだ」
「だって、うるさいじゃない。面倒よ。詩子ちゃんとかすねるしさ」
　わけのわからん言い訳しやがって。結局俺は六年の冬休み、美里と頭つき合わせてずっと、受験勉強という名の「どつきあい」を続けていた。

　美里の場合は、かなり早い段階から受験勉強をはじめていたということだし、塾にも通っていた。ということは、青大附中を受験するであろう頭のいたくよろしい連中と話をする機会もあったろうし、青大附中がどういうお坊ちゃまお嬢ちゃま集団なのかってことも理解していたんだろう。当然、俺たちとは毛並みの違う連中だってことも、承知していたに違いない。
　成績は俺と同じくらいだったし、まあへまやらかさねば受かる程度の頭は持っている。けど学校って成績だけが命じゃねえだろ？　美里みたいに納得いかねえことはどんどん噛みつき、沢口に危険視され、女子連中からは恐怖の視線を送られるような奴が、はたしてそんなおりこうさん集団の中でやっていけるだろうか？　俺は九十九パーセント、無理だと思う。小学校時代は俺が一緒につるんでられたからいいにしても、もしたった一人になっちまった場合どうするんだろ。代わりの相棒がいりゃあいいが、果たしているのか？　これも俺は自信を持って言い切っちまおう。美里のような爆弾女子の取り扱い方をマスターしてるのは、俺、羽飛貴史ひとりだ。簡単に、俺の代わりが見つかるわけがない。
　――青大附中のお坊ちゃま連中に、美里の相棒になる根性ある男子が、いるわけない。
　俺も、たぶん美里も、その一点だけは、絶対確信していたはずだ。

「あのさ、美里。お前、青大附中に行ったからって、そう簡単にやることなすこと変わるわけねえよ。どうせお前、他の奴らに合わせたいなんて思ってねえだろ」
　目を合わせるのもなにか嫌で、横を向いたまま俺は話し掛けた。
「立村って奴、見た目まじめそうに見えるけれど、どうもそれだけじゃないような感じなんだよな」
「あの、立村くんが？」
「俺の本能でぴーんときたんだ。もしあいつが単なるお坊ちゃまだったら、俺の方でしゃべりかける気起こさなかったと思うんだな、たぶん。それに、さっき三人でいた時、楽しかっただろ」
　気になったことだけ、思いつきでつぶやいた。美里もうつむいたまま頷いた。
「……うん」
「だろ」
「またはじかれたらどうしようとか、思わない？」
「思わねえよ。ひとりでも話が通じる奴がいれば、怖くなんかねえよ」
　美里からは見えない角度に顔を向けたまま、はっきり聞こえるよう答えた。
　返事は待たなかった。俺はペダルを漕ぎ出した。

　小学校時代のクラスメイトと顔を合わせることもなく、警察に二人乗りの現行犯で補導されることもなく、俺は美里を無事、家まで送り届けた。今朝通った時に閉めておいた車庫のシャッターが開きっぱなしで、緑の車が顔を出していた。ってことは、母ちゃんズ、すでにお帰りってことだろう。美里も肩をすくめてため息ついた。
「どうしよ、母さんたち戻ってきてるよ。貴史んちのおばさんもいるみたいだよ」
　ちゃんと許可をもらって帰ったんだ。母ちゃんズに罵られるようなことはしてねえよ。でも美里の顔はなんか浮かない。何か弱みでも握られてるのか？　こいつ。
「一応、バス代もらってるのよね。ささやかな小遣い、今さらまきあげられたくないよね」
「青大附中からここまでだといくらくらいかかるんだ」
「片道百三十円くらいかな」
「ポテトチップス一袋は買えるなあ」
　その辺の懐事情は俺もよっく理解している。一案が浮かんだ。
「また面倒になるからな、お前、一人で帰ったことにしろよ。俺と二人乗りしたってことがばれたら、母ちゃんズに何言われるかわからねえよ」
「わかった。じゃあ明日ね」
　挨拶代わりにいつものおさげをひっぱってやろうか、つい頭に手を伸ばしてしまった。なんか変な動き方している。やばい。動く前に気付いてやめた。ごまかした。
「しっかし、美里。髪の毛なくなると、女子に見えねえな」
「あんたに思われなくて結構よ」
「思われたい奴だっているんだろ。誰とは言わねえが」
　ちらりと匂わせてやった。やはり美里の反応はわかりやすい。
「何考えてるのよ。今度はあんたまで私を『色きちがい』とか言うつもり？」
「ばあか、言うわけないだろ。俺の目から見た、事実だけだって」
　真新しいかばんを両手で縦長にもち、美里は俺を思いっきりぶんなぐろうとしやがった。甘いな。俺の身のかわし方は天下一品、小学時代一度だって教師連中に負けたことなかった俺の腕。すばやく方向転換をし、一気にペダルをたくさん踏み、我が家へと急いだ。
　美里と付き合いの長い俺のこと、わが身を守るのは当然だ。

　首筋にだけひんやりと走る風は乾いていた。なんか風邪引いたみたいに咽がひりひりしそうだった。俺はすぐに自転車を車庫に付けた。うちの母ちゃんは相棒・美里の母ちゃんと盛り上がっているらしいし、姉ちゃんもどっかへ行っちまった。名門私立中学に長男の俺さまが合格したからといって、しょせんこんなもんよ。うちの父ちゃん母ちゃん、盛り上がってるようで結局は脳天気。お坊ちゃまごっこなんてしやしねえ。こういう羽飛家の家風を俺は猛烈に気に入っている。
　郵便受けの後ろに隠してある鍵をひっぺがして入り、俺はベッドの上に制服を脱ぎ捨てた。母ちゃん家にいたとしたら、

「どうしてあんたって子は、ちゃんとハンガーにかけないの！」
とぶっ飛ばされるだろうな。俺、今までブレザーなんておぼっちゃん服着たことねえもん。中学行ったら無条件で詰襟の学生服でガクラン着こなす運命だと思ってたんだけどなあ。
　かばんを開けた。あんなに学校では苦労して閉じた金具だってのに、うちではあっさりと外れた。ひっくり返して中から渡された紙の束を床に落としてみた。一枚ぺらっと落ちてきたのは「一年Ｄ組　菱本守教諭担任　クラス名簿」だった。
　ジャストタイミング。いいってことよ。
　まず自分の名前を男子列から探した。下から二番目にあった。
　次に一番下の奴をそのまま眼で追った。『立村上総』と印刷されていた。ふりがなは振ってなかった。名前、父母名、電話番号と住所がプリントされていた。立村の住所は「品山町」だった。俺に話したことはみんなほんとだってことだった。品山なんてどのくらい時間かかるんだろうか。青大附中に通うとしたら、一時間くらい自転車漕がねばならないんだろうな。こいつ、なんだか思いっきり遅刻魔になりそうな気がする。お坊ちゃまぶりっこしたって、しょせんは遅刻魔か。美里にあとであいつの運命教えてやろう。もともと美里は優等生っぽい奴に弱いからなあ。なあに、美里の惚れた奴なんて、俺の目にはすぐにお見通しだもんな。何年つるんでると思ってるんだ。入学早々、やってくれるよな、美里も。
　なんか、猛烈に笑いたくなった。むりやり「はっはっは！」と勢いよく腹筋を上下させてみた。違和感ある。なんでだろう。
　ほんとあいつ、自分でもどう男子に見られているかぜんぜん気付いてねえんだな。美里が好きな奴に熱を上げる時っていうのは、やたらと一オクターブ高い声出してぶりっこするだよな。ぶりっこが嫌いだとか勘違いしたこと言っているけど、さっきの立村相手にした時みたいにな、すぐかっこつけるんだ。
　俺くらいだって。すぐにあいつの考えていることが、見当つくのは。
　ま、俺が思うに立村って奴は見た目よりも実はぼけぼけした奴じゃねえかと思う。美里がぼーっとしたような優等生の王子さまじゃあねえぞあいつ。ま、美里が観念して「私、あの立村くん好きなんだけど、貴史、協力してくれないかな」とか白状したら、そんときは俺も男だ、協力してやるさ。
　ぶるっと震えが走った。汗で身体が冷えちまったようだ。くしゃみが出そうになり、ごくんと飲み込んだ。かなり無理があった。げほげほむせた。しゃれにならねえよ、入学そうそう風邪で休むなんてな。
　なんか独り言、突然言いたくなった。たんすを開きポロシャツを引っ張り出した。
　――なあにが、「あんたと離れたら、私、本当のこと、誰にも言えないよ、貴史」だよ、ばっかみてえ。
　合格発表の日。俺は美里に言わなかった。冗談じゃねえ、これからだって誰が言ってやるもんか。世話かけやがってったく！

　――勝手にわかってしまうんだ、しょうがないだろ。

——終——

白鳥のみずうみへ、いざ

http://p.booklog.jp/book/66793

著者：舞夜じょんぬ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/66793

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/66793

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ